

2008年度 修士論文

bjリーグのボランティアの活動継続意欲に関する研究

A Study on the Adherence of Volunteer in bj-league

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5007A004-1

磯谷 美穂

Isotani, Miho

研究指導教員： 木村 和彦 教授

b j リーグのボランティアの活動継続意欲に関する研究

スポーツビジネス研究領域

5007A004-1 磯谷 美穂

研究指導教員：木村 和彦 教授

【研究の背景】

スポーツに関わるボランティアは「スポーツ・ボランティア」と呼ばれ、「するスポーツ」や「見るスポーツ」と並んで、「支えるスポーツ」としてスポーツの振興に果たす役割が期待されている。スポーツ・ボランティアはこれまで、地域におけるスポーツクラブや団体、国際競技大会などが主な活動の場であったが、近年スポーツのプロ化、事業化を目指すリーグの発足が相次いでおり、新たな活動の場が広がっている。

日本初のプロバスケットボールリーグである b j リーグは、地域に密着したコンパクトな経営を目指しているため、チームには地域での支持基盤の拡大とコストの削減により、安定した経営が求められる。そのため b j リーグのチームにとって、ボランティアの果たす役割は大きく、彼らからの継続的な支援を得る必要があると考えられる。

したがって本研究では、ボランティアからの支援の安定性に注目し、b j リーグのボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を検討することとした。

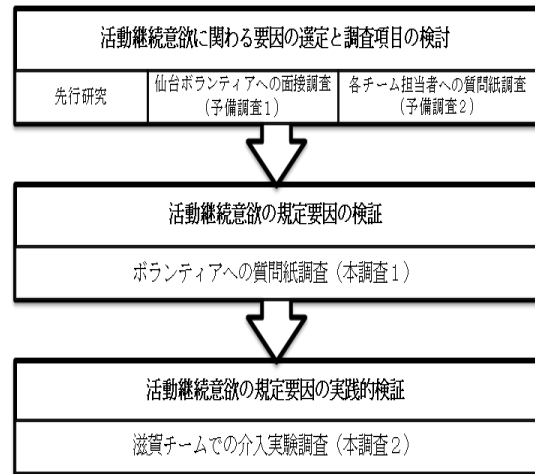
【研究の目的】

本研究の目的は、b j リーグの各チームにおけるスポーツ・ボランティアを対象に、ボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を明らかにすることである。

【研究の方法】

本研究の目的を達成するため、図に示したような研究の枠組みを設計し、具体的な調査

を実施した。



図：研究の枠組み

まず、活動継続意欲に関わる要因の選定と、本調査における調査項目の検討を行うため、先行研究の考証と、仙台 89ERS のボランティアおよび各チーム担当者に対してそれぞれ予備調査1、予備調査2を実施した。これにより選定された要因をもとに調査項目を作成し、本調査1において各チームのボランティアに質問紙調査を実施した。

次に、本調査1のサンプルから活動継続意欲に関わる変数の抽出を行い、さらにそれらのうち活動継続意欲に規定力を持つ要因の検証を行った。

さらに、抽出された活動意欲への影響が考えられる変数のうち、マネジメントが可能なものについて、分析結果と実現可能性を考慮し、実験にて介入する要素を決定した。これにより、活動継続意欲の規定要因の実践的検証を試みた(本調査2)。

本調査 1 の調査期間は、2008 年 11 月から 2008 年 12 月までの試合開催日で、切手を貼付した質問紙を各チームの担当者に送付し、活動に参加したボランティアへの配布を依頼した。合計 179 部を配布し、回収数は 102 部（回収率 57.0%）、有効回答数は 99 部（有効回答率 97.1%）であった。

本調査 2 は 2008 年 12 月 13 日（土）・14 日（日）の 2 日間に、滋賀レイクスターズの会場にて活動に参加したボランティアを対象に実施した。介入する要素を「選手との交流」とし、試合終了後にボランティア全員が集合する場において、数名の選手が活動に対してのお礼や感謝の言葉を伝え、ボランティア全員に握手またはハイタッチをしていくという機会を設けた。その後本調査 1 と同じ質問紙を配布し、1 日目 6 部、2 日目 20 部の計 26 部（有効回答率 100%）を回収した。

【結果と考察】

まず、本調査 1 のサンプルについて、参加動機、満足、組織コミットメントから、活動に関わる変数として、表の 12 変数を抽出した。

表：活動継続意欲に関わる変数

参加動機		選手・スタッフ交流動機
		利他・地域貢献動機
		自己成長動機
		社会交流動機
		自己承認動機
満足	活動満足	スタッフ交流満足
		自己効用感満足
		ボランティア集団性満足
	施策満足	選手交流満足
		感謝・活動サポート満足
		活動情報発信満足
組織コミットメント		組織コミットメント

次に、抽出された 12 の変数と活動継続意欲について、ピアソンの相関分析を行った結果、利他・地域貢献動機、自己効用感満足、組織コミットメント、選手・スタッフ交流動機、スタッフ交流満足、ボランティア集団性満足の 6 変数について、活動継続意欲に対する有

意な相関が見られた。

さらに、この 6 変数を独立変数、活動継続意欲を従属変数として重回帰分析を行った結果、組織コミットメントのみについて標準偏回帰係数に 1%水準で有意性が見られた。

これらの分析の結果と実現可能性を考慮し、活動継続意欲と相関のあった「選手との交流」という要素への介入を決定して、実験（本調査 2）を行った。

本調査 1 での滋賀のサンプルと本調査 2 のサンプルについて、活動継続意欲に関わる変数の平均値の差を分析した結果、本調査 2 のサンプルの選手交流満足の値が有意に高く、実験の効果によるものと推測された。また、活動継続意欲を含む他の 12 変数のうち、統計的に有意ではないが、10 変数について本調査 2 のサンプルの値が本調査 1 の滋賀のサンプルに比べて高かった。

【まとめ】

本研究では以下のことが明らかになった。

- ①相関分析の結果、選手・スタッフ交流動機、利他・地域貢献動機、スタッフ交流満足、自己効用感満足、ボランティア集団性満足、組織コミットメントの 6 変数において、活動継続意欲との有意な相関が見られた。
- ②ボランティアの活動継続意欲に最も強い影響を与える要因はチームへの組織コミットメントである。
- ③介入実験前後の比較の結果、選手との交流に関わる満足が統計的に有意に高く、さらに、統計的に有意ではなかったが、活動継続意欲を含む残りの 12 変数中 10 変数が介入実験後に高い値を示した。

目次

第1章 緒言	1
第1節 研究の背景	1
第1項 スポーツ・ボランティアの現状	1
第2項 b j リーグの現状と課題	1
第2節 研究の動機	2
第2章 研究の目的と方法	4
第1節 研究の目的	4
第2節 研究の枠組み	4
第3節 先行研究	5
第1項 活動継続意欲に関する研究	5
1. 一般的なボランティアの活動継続意欲に関する研究	5
2. スポーツ・ボランティアの活動継続に関する研究	5
第2項 参加動機に関する研究	6
1. 一般的なボランティアの参加動機に関する研究	6
2. スポーツ・ボランティアの参加動機に関する研究	7
第3項 満足に関する研究	7
1. 一般的なボランティアの満足に関する研究	7
2. スポーツ・ボランティアの満足に関する研究	7
第4項 組織コミットメントに関する研究	8
1. 組織コミットメントに関する研究	8
2. 一般的なボランティアの組織コミットメントに関する研究	8
3. スポーツ・ボランティアの組織コミットメントに関する研究	9
第5項 先行研究のまとめ	9
第6項 本研究で用いる用語の定義	10
1. b j リーグのスポーツ・ボランティア	10
2. 組織コミットメント	10
第4節 予備調査	10

第1項 予備調査1	10
1. 概要	10
2. 結果	11
第2項 予備調査2	12
1. 概要	12
2. 結果	13
第3項 活動継続意欲に関わる要因の選定	19
第5節 調査項目の決定	19
第1項 基本的属性	19
第2項 ボランティア活動	20
第3項 スポーツ・運動活動	20
第4項 参加動機	20
第5項 満足	21
1. 活動満足	21
2. 施策満足	21
第6項 組織コミットメント	21
第7項 活動継続意欲	22
第8項 許容できる自己負担金額	22
第6節 本調査1	22
第7節 本調査2	23
第8節 分析方法	23
第1項 活動継続意欲に関わる変数の抽出	23
第2項 活動継続意欲の規定要因の検証	24
第3項 活動継続意欲の規定要因の実践的検証	24
第3章 結果と考察	25
第1節 活動継続意欲に関わる変数の抽出	25
第1項 本調査1のサンプルの属性	25
1. 基本的属性	25
2. ボランティア活動	25

3. スポーツ・運動活動	27
4. 許容できる自己負担金額	27
第2項 活動継続意欲の項目別比較	28
1. 基本的属性	28
2. ボランティア活動	29
3. スポーツ・運動活動	29
4. 許容できる自己負担金額	30
第3項 活動継続意欲	31
第4項 因子分析による参加動機の構成因子の抽出	31
1. 因子分析による因子の抽出	31
2. 因子の命名	31
3. 因子構造の考察	32
第5項 因子分析による活動満足 of 構成因子の抽出	33
1. 因子分析による因子の抽出	33
2. 因子の命名	33
3. 因子構造の考察	34
第6項 因子分析による施策満足 of 構成因子の抽出	34
1. 因子分析による因子の抽出	34
2. 因子の命名	35
3. 因子構造の考察	35
第7項 組織コミットメント	36
第8項 抽出された活動継続意欲に関わる変数	37
第2節 活動継続意欲の規定要因の検証	37
第1項 相関分析による活動継続意欲と相関のある変数の抽出	37
第2項 重回帰分析による活動継続意欲の規定要因の検証	38
第3節 活動継続意欲の規定要因の実践的検証	39
第1項 介入要素の選定	39
第2項 本調査2のサンプルの属性	39
1. 基本的属性	39
2. ボランティア活動	40

3. スポーツ・運動活動	41
4. 許容できる自己負担金額	41
第3項 活動継続意欲に関わる変数間の相関	42
第4項 活動継続意欲の規定要因の実践的検証	42
第4節 考察	43
第1項 ボランティアの活動継続意欲の規定要因	43
第2項 活動継続意欲に関わる変数の介入実験による変化	44
第3項 活動継続意欲との関連が考えられる要因	44
第4章 結論	46
第1節 まとめ	46
第2節 活動継続意欲を高めるための方策	47
第3節 研究の限界と今後の課題	47
引用・参考文献	49
付録・質問紙	52
謝辞	62

第1章 緒言

第1節 研究の背景

第1項 スポーツ・ボランティアの現状

個人とスポーツとの関わり方が多様化する中で、「するスポーツ」や「見るスポーツ」と並んで、「支えるスポーツ」がスポーツの振興に果たす役割に期待が寄せられている。特に近年その規模の大きさや、大都市の主要道路をコースとすることで話題となった東京マラソンにおいては、約3万人のランナーを支えるため、約1万人のボランティアが活躍したことは印象深い。

このようなスポーツに関わるボランティアは「スポーツ・ボランティア」と呼ばれる。文部省（現・文部科学省）・スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議(2000)¹⁴⁾は、スポーツ・ボランティアを「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的にささえたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」と定義した。また、山口(2004)²⁶⁾は、スポーツ・ボランティアの種類を、日常的な「クラブ・団体ボランティア」、非日常的な「イベント・ボランティア」、アスリートによる「アスリート・ボランティア」の3つに分類している。このことからわかるように、スポーツ・ボランティアの主な活動の場は、地域におけるスポーツクラブ・スポーツ団体と、国際競技大会・地域スポーツ大会などのスポーツイベントの2つとされる。

また、スポーツ・ボランティアの現状について、SSF 笹川スポーツ財団(2006)²¹⁾によると、成人のスポーツ・ボランティア実施率の推移は、1994年から2000年まで6.1%から8.3%と上昇し、2002年には7.0%と減少したが、2004年には7.9%と再度上昇している。さらに2004年の実施率を年代別で見ると、40歳代が16.4%で、続く50歳代の9.3%や30歳代の7.2%を大きく上回っている。

第2項 bjリーグの現状と課題

日本初のプロバスケットボールリーグである日本プロバスケットボールリーグ、通称bjリーグ³⁾（以下bjリーグと表記する）は、2008年度から滋賀レイクスターズと浜松・

東三河フェニックス（以下、チームはすべて地域名で表記する）の2チームを加え、チーム数はリーグ発足時の6チームから、その倍の合計12チームで4シーズン目を迎えている。bjリーグ内部資料⁴⁾によると、bjリーグ全体の入場者数の合計は、1年目の2005-2006シーズンが249,331人、2006-2007シーズンが397,788人、2007-2008シーズンは510,742人とシーズンを追うごとに順調に増加し、2008-2009シーズンは80万人を目標としている。bjリーグ担当者によると、チームの経営規模は平均で年間2～3億円前後とサッカーや野球に比べ小規模であり、リーグの運営形態はシングル・エンティティ（単一事業体）を採用し、サラリーキャップ制を導入するなど、リーグ経営の安定化を図る工夫がなされている。さらに、bjリーグは3つの理念のうちの1つに「グローバル&コミュニティ」を掲げ、「ホームタウン制、地元密着型チーム経営により支持基盤の安定・拡大を図る」としている。これは、チームが地域に密着した経営を行い、支持基盤を確保することによって、コンパクトであっても安定した経営を目指すことを意図している。だが一方で、そのコンパクトな経営規模のために、チームは運営にかかる様々なコストを可能な限り抑える努力をしなければならない。特に試合開催時の人件費について、スタッフ1人につき1万円支払い、1試合当たり約50人のスタッフが必要と仮定して概算すると、今シーズンは1チームにつき26試合開催されるので、1万円×50人×26試合=1300万円が今シーズンに必要な人件費となる。これは経営規模が約2～3億円のチームにとって、非常に大きな負担である。

したがってbjリーグのチームにとって、地域での支持基盤の拡大とコストの削減は、経営の安定化に関わる重要な課題であるといえる。

第2節 研究の動機

チーム経営の安定化に寄与する要因に着目すると、松橋・金子(2007)¹¹⁾は『『収益性の安定』に寄与するのは、現金収入だけでなく、市民ボランティアのクラブ運営支援や、地元企業による物品やサービスによる支援などもある』と述べ、収益性の安定に対するボランティアのクラブ支援の寄与を指摘した。さらに、存続の危機を経験したことのあるクラブは積極的にボランティアを増やす傾向にあることも明らかにされた。ボランティアの支援を受け入れることにより、運営コストの削減につながることは明らかであるが、それとともに、ボランティアからの支援は、経営危機に対するリスクヘッジとしても意識されてい

ることがうかがえる。

b j リーグにおいても、経営状況の悪化を想定し、普段からボランティアの安定的な支援を確保しておくことが必要であると考えられる。さらに、b j リーグの理念である地元密着という視点においても、ボランティアの支援を得ることは、地域住民に対して「支えるスポーツ」の場を提供し、スポーツ振興に貢献すると同時に、「地域住民によって支えられるチーム」として認められ、地域との関係の向上や、支持基盤の拡大につながると考えられる。

したがって、本研究ではボランティアからの支援の安定性に注目し、b j リーグのボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を検討することとした。安定的な支援は、前述したように経営危機へのリスクヘッジになるとともに、業務の質や効率性の向上にもつながる。

また、これまでスポーツ・ボランティアの活動の場としては、地域におけるスポーツクラブ・スポーツ団体と、国際競技大会・地域スポーツ大会などのスポーツイベントのそれぞれに対して、研究が進められてきた。しかし、b j リーグなどのプロスポーツは、地域におけるスポーツクラブ・スポーツ団体に属すると考えられるが、試合の興行などは地域におけるイベントとも取ることができる上に、日常的、非日常的という分類においても、そのどちらに属するかという判断が困難であり、研究の蓄積がなされていない。J リーグの開幕以降、スポーツのプロ化、事業化を目指したb j リーグのようなリーグの発足が相次いでおり、今後も増加傾向にあると考えられる。これらのリーグやそれに所属するチームは、地域での支持基盤の拡大とコストの削減というb j リーグ同様の経営課題に直面することが予測され、その課題に対してボランティアが果たす役割は大きい。それゆえに、今後プロスポーツのボランティアについても研究が進められる必要性があり、本研究はその点で意義があると考えられる。

第2章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的

本研究の目的は、b j リーグの各チームにおけるスポーツ・ボランティアを対象に、ボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を明らかにすることとする。

第2節 研究の枠組み

本研究の目的を達成するため、図1に示したような研究の枠組みを設計し、具体的な調査を実施した。

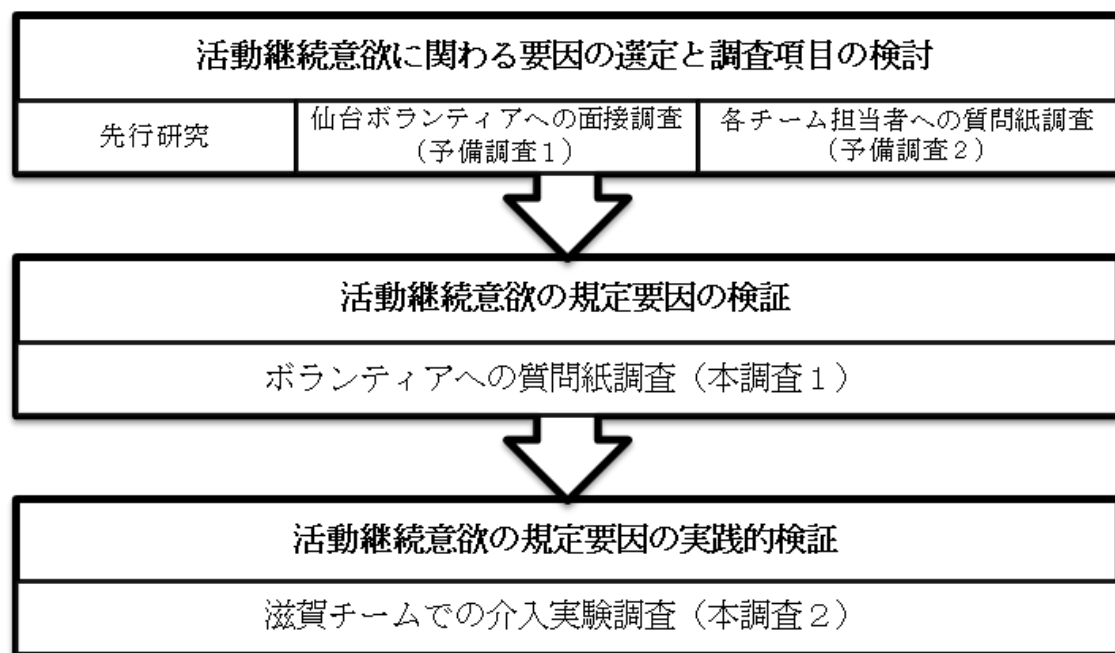


図1：研究の枠組み

まず、活動継続意欲に関わる要因の選定と、本調査における調査項目の検討を行うため、先行研究の考証と、仙台のボランティアおよびチームに対してそれぞれ予備調査1、予備調査2を実施した。これにより選定された要因をもとに調査項目を作成し、本調査1において各チームのボランティアに質問紙調査を実施した。

次に、本調査1のサンプルから活動継続意欲に関わる変数の抽出を行い、さらにそれらのうち活動継続意欲に規定力を持つ要因の検証を行った。

さらに、抽出された活動意欲への影響が考えられる変数のうち、マネジメントが可能な

ものについて、分析結果と実現可能性を考慮し、実験にて介入する要素を決定した。これにより、活動継続意欲の規定要因の実践的検証を試みた（本調査2）。

第3節 先行研究

第1項 活動継続意欲に関する研究

1. 一般的なボランティアの活動継続意欲に関する研究

綿ら(1990)²⁴⁾は障害児キャンプのボランティア指導について、ボランティア指導者の社会的な立場・地位と、それに伴う役割の葛藤に焦点を当て、ボランティア指導者の社会的な立場・地位を職業人、家庭人、個人、ボランティアとしての立場に分類し、それぞれの役割での役割葛藤と活動の継続性との関連を検証した。

また、安藤・広瀬(1999)²⁵⁾は、環境ボランティアの活動継続意図の規定要因を、「環境運動自体の望ましさに関わる要因」と「個人として得られるものに関わる要因」の2つに分類して検討し、前者よりも後者の要因の方が活動継続意図との関連が強いことを明らかにした。これにより、団体の目的が達成されたかどうかに関係なく、活動に参加した個人が得ることができる組織との結びつきや、他者からの期待などによって活動継続意図が維持されることが示唆された。

桜井(2007)^{17B)}は先行研究から、ボランティアの活動継続に影響を与える「個人的要因」、「参加動機要因」、「状況への態度要因」の3つの要因を指摘し、それらの要因をもとに調査を実施した。状況への態度要因とは、「ボランティア自身が、ボランティア活動における様々な状況に対して、どのような認知態度（特に満足感）を取っているか」であり、これは前述の3つの要因のうち、ボランティアの受け入れ組織側が操作できる唯一の要因であるため、「マネジメント要因」ともいえるとした。また、実施された調査の結果、ボランティアの年齢層毎に活動継続に影響を与える要因が異なっていることを明らかにした。

2. スポーツ・ボランティアの活動継続に関する研究

山口ら(1989)²⁷⁾はスポーツイベントのボランティア活動の継続意欲を説明する因果関係モデルを設定し、パス解析によってモデルの妥当性を検証した。その結果、イベントの成功に対する「達成動機」と「ボランティア動機」が高ければ高いほど、活動満足度が高く、

その結果が活動の継続意欲に強い影響を及ぼしていることが明らかにされた。また、「達成動機」よりも「ボランティア動機」の方が活動の継続意欲への直接的な影響が高いことも同時に指摘された。

綿ら(1991)²⁵⁾は、地域スポーツイベントにおけるボランティアについて、初参加者と活動継続者の継続意欲の規定要因を比較し、初参加者の継続意欲が参加動機要因に強く規定されることを明らかにした。

長ヶ原ら(1991)²⁶⁾は、地域スポーツイベントにおけるボランティアについて調査を実施し、個人的な興味などに基づく個人的ボランティア動機、年齢、運動・スポーツ活動、ボランティアの経験の4つの変数が活動の継続意欲に対して強い規定力を持つことを明らかにした。

第2項 参加動機に関する研究

1. 一般的なボランティアの参加動機に関する研究

Clary(1998)²⁷⁾はボランティアの動機を、機能的アプローチにもとづいて6つの機能を持つと仮定して分類し、それを測定するための「VFI (Volunteer Functions Inventory)」を作成した。機能的アプローチとは、桜井(2007)^{17A)}によると、「人間の態度を、心理力学的動機要因としていくつかの機能に分解し、理解する考え方」である。また、6つの機能とは、「価値 (Values)」、「理解 (Understanding)」、「社会 (Social)」、「キャリア (Career)」、「保護 (Protective)」、「高揚 (Enhancement)」であった。

さらに桜井(2007)^{17A)}は先行研究から、一般的なボランティアの参加動機へのアプローチの方法を「利他主義動機アプローチ」、「利己主義動機アプローチ」、「複数動機アプローチ」の3つに整理している。利他主義動機アプローチとは、ボランティア活動を自分の利益にならない他人のことを進んで行う姿勢が表出した行動であるとする見方であり、一方、利己主義動機アプローチでは、ボランティア活動への参加は何らかの見返りを期待してなされる行為であり、コスト（負担）とベネフィット（利益）を比較し決定されるという考え方である。これら2つの立場は対立しているが、複数動機アプローチは、それらを乗り越えた立場であり、ボランティア活動への動機は複雑で、さらにその動機を構成する種類や強弱は人によって異なると考えられている。前述した機能的アプローチも複数動機アプローチに含まれる。そして、これらの説明を踏まえ、ボランティアの動機を多様に捉えられることから、ボランティアのマネジメントを行う際の複数動機アプローチの有効性を指摘

した。

2. スポーツ・ボランティアの参加動機に関する研究

松本(1999)¹²⁾はスポーツイベントのボランティアについて、参加動機によるボランティアの類型化を行った。その結果、類型化されたグループごとに特徴的な参加動機因子が確認されたことから、参加動機によるボランティアの類型化の有用性を示した。また、このことにより、スポーツイベントに参加するボランティアの指向性の違いが明らかとなった。

松岡・小笠原(2002)¹³⁾は、ボランティア活動を行う動機を構成する要素についての先行研究を整理し、さらに、非営利スポーツ組織のボランティアに対して参加動機についての調査を実施した。その結果、動機を構成する8つの要素を抽出し、それぞれの要素の説明を加えた。これにより、ボランティアが持つ多様な動機を明らかにし、それぞれの動機への適切な対処の必要性を論じた。さらに、ボランティアの動機は、活動の開始時から仕事を経験するにつれて、変化する可能性があることを指摘した。

第3項 満足に関する研究

1. 一般的なボランティアの満足に関する研究

桜井(2007)^{17B)}は「状況への態度要因」として、先行研究から具体的な項目を整理している。「状況への態度要因」は前述したように、ボランティアが活動における様々な状況に対してとる認知態度（特に満足感）であるため、ボランティアの活動における満足に相当すると考えられる。さらに、「状況への態度要因」に含まれる具体的な項目として「組織サポート」、「業務内容」、「集団性」、「自己効用感」の4種類を示した。各項目の内容に関して、「組織サポート」は組織からボランティアへの配慮に関するもの、「業務内容」は活動での業務内容に関するもの、「集団性」は、ボランティア活動を通して作られる人間関係に関するもの、「自己効用感」は活動への参加による自己効用感の獲得であると説明を加えている。

2. スポーツ・ボランティアの満足に関する研究

新出(1998)¹⁹⁾は長野オリンピックにおけるボランティアを対象に、期待と満足度に関する研究を実施した。ボランティア活動の前後2回にわたって調査を行うことにより、参加前の期待と参加後の期待の充足が、活動の満足感に及ぼす影響の検証を試みた。

田引(2005)²²⁾は、知的障害者のスポーツを支えるボランティアについて、満足度を規定

する参加動機の検証を行った。その結果、満足度因子の「対人的評価」に対して、参加動機因子の「個人的興味」と「社交」の2つの因子の規定力が高く、活動を通して人との出会いや協力などに興味を持ち参加したボランティアは、対人コミュニケーションにおいて満足度が高いことが確認された。

第4項 組織コミットメントに関する研究

1. 組織コミットメントに関する研究

組織コミットメントは組織への帰属意識とも呼ばれ、これまで主に会社組織を対象に研究がなされてきた。

Porter ら(1974)¹⁰⁾ は組織コミットメントを「ある組織に対する個人の同一化と関与の強さ」と定義し、離職の予測因として有効であるとしている。また、組織コミットメントの構成要因として、「組織の目的や価値を強く信じ、受け入れていること」、「組織のためには、進んで多大な努力をすること」、「組織の一員であり続けたいという明確な願望があること」の少なくとも3つがあると指摘し、それを測定するため OCQ(Organizational Commitment Questionnaire)という15項目からなるスケールを作成した。

関本・花田(1987)¹⁸⁾は、Porter らが開発したスケールを日本企業で使用する上での問題点を指摘し、企業への帰属意識を測定する新たなスケールを開発し、調査を実施した。因子分析の結果、Porter らが指摘した組織コミットメントの構成要因に対応する3因子に加え、新たに「組織から得るものがある限り組織に帰属する功利的帰属意識」の因子を抽出した。

2. 一般のボランティアの組織コミットメントに関する研究

安藤・広瀬(1999)²⁾は、環境ボランティアについて、環境運動を行う組織への同一化の程度を「組織への帰属意識」として測定し、その効果を検討した。その結果、「組織への帰属意識」は活動継続意図の重要な規定因となることを明らかにした。また、ボランティア組織の特徴として、会社組織とは異なり、物理的な報酬がなく、個人と組織とのつながりが緩やかで組織への出入りが自由であることを指摘し、組織への帰属意識を強化する要因が少ないと考えられるとも述べている。しかし、そのような組織においても、組織との結びつきは個人にとって重要であるということが示唆された。

3. スポーツ・ボランティアの組織コミットメントに関する研究

長ヶ原ら(1990)⁶⁾は地域スポーツイベントのボランティアについて、地域団体に対する帰属意識とボランティア活動の満足との関連を検証した。分析により、地域団体への帰属意識の高いボランティアの方が、それが低いボランティアよりも、活動に対する満足が高くなる傾向が確認された。

北村ら(2005)⁹⁾は、スペシャルオリンピックスのボランティアを対象に、15項目のOCQスケールを用いて調査を行い、組織コミットメントについて、対象のボランティアの個人的属性、参加状況、組織での役割のそれぞれによる差異を検討した。

第5項 先行研究のまとめ

先行研究の考証では、一般的なボランティアに関するものと、スポーツ・ボランティアに関するもの双方の研究から有用な知見を得た。特にスポーツ・ボランティアに関する研究において、長ヶ原ら(1991)⁵⁾や山口ら(1989)²⁷⁾が共に活動継続意欲との関連を指摘しているのが、ボランティア活動への関心による参加動機であったことは注目すべき点である。

活動継続意欲に関する研究においては、さまざまな要因とボランティアの活動継続意欲との関連が明らかにされてきた。しかし、それらの多くは、ある特定の要因と活動継続意欲との関係に焦点を当てたものであった。現実にはボランティアの活動継続意欲に対しては、複数の要因が複雑な関連性を持って影響していると考えられ、その点で活動継続意欲への複数の要因の規定力を明らかにした長ヶ原(1991)⁵⁾や、因果関係モデルを設定し、複数の要因が活動継続意欲に与える影響を構造的に検証した山口ら(1989)²⁷⁾の研究は興味深い。

したがって、本研究では、ボランティアのマネジメントへの示唆を考慮し、活動継続意欲に関する要因を複数設定することとし、先行研究の考証から、参加動機、満足、組織コミットメントの3要因を選定した。参加動機は、多くの先行研究において活動継続意欲との関連が認められ、さらに参加動機構造について研究の蓄積があることや、それを測定する尺度の開発も進んでいることから選定した。「満足」は先行研究において、活動継続意欲や参加動機との関連が指摘されている要因である。

さらに、桜井(2007)^{17B)}は「状況への態度要因」について、ボランティアの「認知態度(特に満足感)」の対象となる活動での様々な状況を詳細に分類しており、本研究においてもその分類が適用できると考えられるため選定した。「組織コミットメント」については、ボランティアに関する研究においては、まだ研究の蓄積が十分になされていない要因である。

しかし、安藤・広瀬(1999)²⁾は環境ボランティアについて、組織コミットメントが活動継続意図の規定因であることを指摘し、ボランティア組織のような会社組織とは異なる緩やかな組織においても、個人と組織の関係は重要であることを明らかにした。したがってスポーツ・ボランティアの組織においても、組織コミットメントが活動継続意欲の規定因となるのではないかと推測し選定した。

第6項 本研究で用いる用語の定義

1. b j リーグのスポーツ・ボランティア

本研究では、総務省(2006)²⁰⁾の定義を参考に、特にb j リーグの各チームのスポーツ・ボランティアを「報酬を目的としないで、自分の労力、技術、時間を提供して、地域社会やチームのための活動に参加する人」と定義した。なお、b j リーグでの活動の現状を踏まえて、時間給や日当などの賃金ではなく、交通費など実費負担分や昼食・ユニフォームなどの物的な提供を受けている人を含むこととする。また、特に必要がない限り、表記の短縮のため文中では、「ボランティア」と記す。

2. 組織コミットメント

「ある組織に対する個人の同一化と関与の強さ」(Porterら, 1974)¹⁰⁾と定義する。

第4節 予備調査

第1項 予備調査1

1. 概要

b j リーグのボランティアの活動の現状から、活動継続意欲に影響を与える要因を検討するため、仙台 89ERS (以下、仙台とする)のボランティアに対して面接調査を行った。仙台は2006-2007 レギュラーシーズンにおいて、ボランティアの活躍が認められ、b j リーグから「チームアシスト」の表彰を受けており、ボランティア活動が活発であるとしてb j リーグから「適切な調査対象」として紹介を受けた。調査日は2008年7月28日(月)で、場所はb j リーグと仙台が共同で主催する中学生対象の「2008-2009 b j リーグ ジュニアバスケットボール大会」仙台予選の会場にて実施した。調査対象は、同大会に参加

したボランティア 13 人で、性別の内訳は男性 8 人、女性 5 人であった。年齢に関する質問項目は設定しなかったが、男性は大半が中高年、女性は過半数が学生、その他が中高年であったと推測される。調査方法は、ボランティアの活動の合間に 2～3 人のグループおよび個人に対して、半構造化面接法にて行った。

おもな質問項目は、「情報入手経路」、「参加動機」、「活動継続の誘因」、「活動継続者と短期脱退者の特徴」、「チームへの要望」である。これらの中で「活動継続の誘因」は、「仙台 89ERS のボランティアの良い点は何ですか。」という質問によって調査した。

桜井(2007)¹⁷⁾は、「ボランティアを活動に留めておく」ことのできる方法を「誘因」として、有形のものと無形のものに大別している。また、そのうち無形の「誘因」とは、「状況への態度要因」であり、「活動自体の魅力」、「集団の魅力」、「自己効用感」に対するボランティアの態度（満足か否か）であるとしている。活動を継続しているボランティアが考える、良い点とはすなわち、ボランティアが活動を継続する無形の誘因であると考えられるため、質問項目名は「活動継続の誘因」とした。

2. 結果

調査により得られた回答を表 1 にまとめた。

「情報入手経路」として最も多いのが、既に活動に参加しているボランティアからのクチコミであった。「参加動機」では学生のボランティアが、大学のプログラムとして単位が認定されるためと回答した他は、チームや選手を応援したい、支えたいというチームや選手の支援に関する動機が確認された。「活動継続の誘因」に対する回答からは、参加の手軽さや、それに影響するボランティア同士の人間関係の円滑さが、ボランティアを活動に留めるのに重要であることが確認できた。「活動継続者と短期脱退者の特徴」の質問項目では、「活動継続者」については、チームやスポーツに愛着があるということや、複数のボランティアを兼ねており、ボランティア経験が豊富であるという特徴が挙げられた。それに対し、「短期脱退者」に関しては、他のボランティアとうまく人間関係を築けないということや、特に学生のボランティアが、就職などによって生活状況が変化しやすい状況にあるという特徴があった。「チームへの要望」には、ボランティアのリーダーを育成し、ボランティア組織の自主性を求める回答があった。また、仙台と同じ仙台市に本拠地を置く、ベガルタ仙台や東北楽天ゴールデンイーグルスのボランティア組織に倣うべきという回答もあり、自主性を求める声の背景には、仙台のボランティアの、他組織での豊富な活動経験が

影響していると考えられる。

表 1：予備調査 1 の回答

情報入手経路情報入手経路		・ ボランティアからのクチコミ ・ 新聞 ・ テレビ ・ 大学でのプログラム
参加動機		・ チーム・選手を応援したい、支えたい ・ 活動に参加することで単位が認定されるため ・ 社会へ恩返しするため
活動継続の誘因		・ 気軽に参加できる ・ 友人・仲間作り ・ やめてもまたやりたいと思う ・ 一人でも参加できる ・ ボランティアが皆優しい ・ 自分も何かやらなければならないと思う ・ 選手との触れ合い
ボランティア の特徴	活動継続者	・ スポーツが好き ・ チームが好き ・ 複数のボランティアを兼ねている
	短期脱退者	・ 人間関係に疲れる ・ 学生は短期でやめてしまう
チームへの要望		・ ボランティアリーダー・組織の育成が必要 ・ ボランティアの自主運営に任せてほしい ・ ベガルタ仙台や東北楽天ゴールデンイーグルスのようなボランティア組織を目指すべき

第 2 項 予備調査 2

1. 概要

チームでのボランティアの活動状況と、ボランティアに対する施策から活動継続意欲に影響を与える要因を検討するため、b j リーグに所属する全 12 チームのボランティア担当者に対して、質問紙調査を実施した。b j リーグの担当者に本研究の主旨を説明し、2008 年 8 月 22 日（金）に同担当者から全チームの担当者宛に、メールにてデータ形式の質問紙を送付した。回答が記入された質問紙は F A X あるいはメールにて返送され、返送

のないチームに対しては数回の督促を行い、全 12 チームから質問紙を回収した。ただし、今シーズンから参入する滋賀と浜松・東三河は、昨シーズンの経験がないため、その 2 チームについては、本調査では扱わないこととした。

質問項目には、昨シーズンのボランティアに関して、「1 試合当たりの参加人数」と「業務」の項目を設定し、その他に「募集方法」、「説明会の頻度と対象者」、「待遇」、「施策」といったチームでのボランティア対応の内容を聞く項目を設定した。「1 試合当たりの参加人数」は、本調査 1 でのサンプル数を予測するために作成した。そして「業務」と「募集の方法」、「説明会の頻度と対象者」、「待遇」、「施策」の項目に関しては、それぞれ活動継続意欲に何らかの影響を与えられ、本調査 1 での調査項目に加えるために、項目の選択肢の検討を目的として作成した。「業務」と「募集方法」、「待遇」の項目は筆者の b j リーグでのボランティア対応の経験をもとに選択肢を作成した。「施策」の項目の選択肢に関しては、桜井(2007)¹⁷⁾がボランティアの活動継続への「有形の誘因」として挙げている「象徴的報酬」を参考に作成した。さらに、活動継続意欲に関わる要因を抽出するため、まず、ボランティアの活動の継続性がどの程度重要であると思うかを聞く「活動継続性の重要度」の項目を「1. まったく重要でない」から「5. 大変重要である」までの 5 段階リッカート尺度にて測定した。加えて、自由記述項目として、「活動継続性の重要度の理由」と、「活動継続のための施策やその効果」、「長期継続者と短期脱退者の差異」、「活動継続に影響を与えられる要因」を聞く項目をそれぞれ加えた。

なお、予備調査 2 は b j リーグの各チームにおけるボランティアの現状調査を兼ねたものであったため、巻末に付録として付した質問紙の質問項目の中には、本調査では用いていないものが含まれている。

2. 結果

予備調査 1 で得られた回答をまとめたものを表 2 に示した。各質問項目で、「その他」や具体的な内容を問う選択肢を選んだ際に、自由記述欄に記入された内容は、表中に網かけで示した。ただし、「募集方法」の「4. 外部団体（ボランティア団体など）への依頼」と「5. 教育機関（大学・専門学校など）への依頼」を選択した際には、その団体名や機関名を聞いているが、当該機関から承諾を得ていないため、本文には掲載していない。また、「活動継続性の重要度の理由」と、「活動継続のための施策やその効果」、「長期継続者と短期脱退者の差異」、「活動継続に影響を与えられる要因」は自由記述であったため、

回答内容を要約して掲載した。

「1 試合当たりの参加人数」は 10 チームの平均が 14.6 人で、最も人数の多いチームが仙台で 40 人、最も少ないチームが高松で 2 人であった。「業務」の項目では大半のチームが会場の設営・撤収や会場の誘導案内、チケットもぎりなど、比較的人手を要する業務を中心に、試合運営に関わる広範な業務をボランティアに依頼していた。「募集方法」の項目では、チームのホームページでと既存のボランティアからの紹介・ロコミを介して募集を行うチームが大半であることが伺えた。さらに、地域のボランティア団体や大学に依頼し、募集を行っているチームもあった。

「説明会の頻度と対象者」の項目に関しては、シーズン前、またはシーズン毎に参加者全員を対象に説明会を実施するチームが多く、それに加えて試合毎に現場で業務の説明を行っていた。他にも月に 1 回の定期的なボランティア会議や、新規のボランティアとリーダー的なボランティアとの説明会を実施しているチームがあった。また説明会を実施していないというチームは 2 チームであった。

「待遇」の項目では、ほとんどのチームが弁当などの食事の支給を行っていた。さらにボランティアにユニフォームを貸与するチームも多かった。試合のチケットを贈与するチームもいくつかあり、交通費を支給しているチームは 2 チームであった。

「施策」に関しては、活動の際のチーム代表の挨拶を実施しているチームが多く、そのほか数チームが食事会・懇親会や選手との交流の機会などボランティア同士または、ボランティアとチーム・選手とのコミュニケーションを図る施策をとっていた。また、名札や登録証の発行やボランティアリーダーの育成に努めているチームもあった。

「活動継続性の重要度」では、5 段階尺度で 1 チーム以外は「5」を選択した。

その理由である「活動継続性の重要度の理由」で多く見られた回答は、運営にかかる経費の削減や、多くの業務をボランティアが行っているため、彼らなしでは試合運営が困難であるということであった。他にも、ボランティアが継続することによって試合運営の質の向上や、新規のボランティアを指導できるボランティアが必要であるためといった回答が見られた。

「活動継続のための施策やその効果」の項目では、ミーティングの機会を設けて、ボランティアからの意見を聞く機会を設けるということと、懇親会の場や日常的にボランティアとのコミュニケーションをとることを意識しているチームが多かった。そのほか、何らかの形で選手とボランティアとの交流の場を設けているチームも見られた。これらの施策

よって、ボランティアのモチベーションの向上につながり、特に選手との交流の機会は、ボランティア登録の継続やチームのボランティア募集活動が促進されるという効果があるようである。

「長期継続者と短期脱退者の差異」の回答は、チームによって長期継続者と短期脱退者のそれぞれの特徴や傾向を記述しているものもあれば、差異があると思われる事柄そのものを記述しているチームもあった。回答では、試合観戦や選手との交流などの報酬を期待して参加したボランティアや、ボランティア同士やチームの職員とのコミュニケーションがうまくいかない場合は、短期でやめる傾向にあるということが挙げられた。そのほか、バスケットボールに対する愛情やライフスタイル、長時間の業務に対する許容の差異が活動の継続に影響しているという現状が指摘された。

最後に、「活動継続に影響を与えると思われる要因」の項目では、主に、チームを支える、応援するということに対する実感や達成感と、ボランティア活動・業務に対するモチベーション、充実感、やりがい、さらに、ボランティア同士、職員とのコミュニケーションや地域社会、が挙げられた。加えて、バスケットボールへの気持ちのほか、チームや職員の魅力、ボランティアのライフスタイルなど多様な回答があった。

表 2：予備調査 2 の回答

【イースタン・カンファレンス】

チーム	仙台	新潟	富山	埼玉	東京
ボランティア数(人)/試合	40	10	15	10	13
業務	チケットもぎり、誘導案内、チラシ等の配布・準備、身体障害者の誘導案内、会場清掃、ゴミ回収、総合案内、イベントブース補助、ボランティアサポート	会場設営、チケットもぎり、誘導案内、チラシ等の配布・準備、入場者カウント、身体障害者の誘導案内、会場清掃、会場撤収	会場設営、チケットもぎり、チラシ等の配布・準備、会場清掃、会場撤収	会場設営、チケットもぎり、誘導案内、チラシ等の配布・準備、身体障害者の誘導案内、会場清掃、会場撤収、関係者・報道等の受付業務	会場設営、チラシ等の配布・準備、グッズ等販売、会場撤収、広報受付、チケット販売受付、会場イベントアシスタント
募集方法	チームのホームページでの告知、新聞・雑誌での告知、ボランティア参加者の紹介・口コミ、外部団体(ボランティア団体など)への依頼	チームのホームページでの告知、ボランティア参加者の紹介・口コミ	チームのホームページでの告知、新聞・雑誌での告知、ボランティア参加者の紹介・口コミ、外部団体(ボランティア団体等)への依頼、教育機関(大学・専門学校等)への依頼、関係者の知人への	チームのホームページでの告知、ボランティア参加者の紹介・口コミ、教育機関(大学・専門学校等)への依頼	チームのホームページでの告知、ボランティア参加者の紹介・口コミ

			依頼		
説明会の頻度と対象者	シーズンに入る前に、登録申込者全員を対象に説明会を実施。	シーズン前に、参加者全員を対象に開催	・ボランティア新規とリーダー的ボランティアとの説明会を実施 ・毎回会場でのミーティング	1回目のみ開催日指定の合同説明会、以後は応募状況に応じて個別説明会。対象者は応募者全員	1シーズンごとに参加者全員を対象に開催
待遇	食事(現物支給)、食事代(550円)、ユニフォーム貸与	食事(現物支給)、ユニフォーム貸与、		食事(現物支給)、ユニフォーム貸与、試合のチケット	交通費(実費負担分)、食事(現物支給)、ユニフォーム貸与、試合のチケット、選手とのふれあいの機会を用意、ブースター感謝祭の招待)
施策	活動時のチーム代表挨拶、表彰制度、選手との交流会、ユニフォームの製作	活動時のチーム代表挨拶、ボランティアリーダーの育成、表彰制度、食事会(懇親会)	ボランティアリーダーの育成、食事会(懇親会)、選手との交流会	活動時のチーム代表挨拶、食事会(懇親会)、選手との交流会、名札・名刺・登録証の発行	ボランティアリーダーの育成、食事会(懇親会)、名札・名刺・登録証の発行
チーム	仙台	新潟	富山	埼玉	東京
活動継続性の重要度	5	5	5	5	5
活動継続性の重要度の理由	・運營業務の半分以上をボランティアが行っているため ・運営経費削減のため	・運営の細部にまで気配りができるように、ボランティアの立場で改善策も考案できるようにするため ・会場全体をまとめるリーダーの開発につながり、職員とボランティアの関係を潤滑にし、スムーズな運営が遂行されるため	・社員の手の回らないところを補っているために、ボランティアなしでは試合が成立しないため	・安定した試合運営を行うため ・仕事内容の把握がより良い会場づくりにつながるため ・新規のボランティアを指導できる指導者を育成するため	・経験者が増えるほど人数の底上げになり、業務の品質も向上するため ・ボランティアリーダー候補が増えると、新規のボランティアのサポートになるため
活動継続のための施策やその効果	・シーズン終了後に選手との交流会を実施し、1シーズンの労を労う→交流会を楽しみにしている人もいる ・ボランティアのリーダー的な方から意見を出してもらい、次シーズンの参考にする→自分の意見が反映されているかどうかはモチベーションに影響があると考えられる	・シーズン途中、シーズン後に意見交換会を開催し、コミュニケーションを図る ・一緒にスポーツをし、互いの壁をなくすように努めている ・主催イベントへの招待・優待を行う、日頃の労を労う	・リーダー的なボランティアと試合終了後に反省点、改善点などのミーティングをしてコミュニケーションを図る ・選手との交流会を設けている	・試合終了後のミーティング、シーズン終了後の意見交換会を開催し、問題点・改善点など参加者の意見を聞く ・シーズン終了後に懇親会(選手も参加)を開催し、参加者同士または参加者とチームのコミュニケーション強化を図る ・ホーム最終戦試合終了後のエンディングセレモニーでシーズン中のボランティア活動風景	・毎試合、ボランティアとのコミュニケーションを取っている ・選手から感謝の気持ちを伝えるようにしている

				の映像を上映	
長期継続者と短期脱退者の差異	・特別な特典(試合観戦、選手との交流)を期待して継続的に参加することは少ない ・定年後の余暇の過ごし方の一つとして参加している人は参加率、継続率が高い ・若年者は転勤や進学、就職で地元を離れることが多く、継続率は高くない	・継続しない人は個人的な事情(就職、出産、進学他)により活動を辞めてしまう ・個人負担とモチベーションを比較して参加・不参加を選択している	・もともからいたボランティアと新規のボランティアの温度差があり、溶け込めない場合は長く続かない	・募集の趣旨と異なる目的(試合観戦、選手との交流等)を持って応募した場合は短期で活動をやめる傾向がある	・目的意識とモチベーション ・チーム担当者や他のボランティアとのコミュニケーション機会
活動継続に影響を与えると思われる要因	【中高齢者】 ・ボランティア自身の生活環境や状況 ・地域社会の活動に関わることに喜びや満足を得ること ・チームを育てているという実感 【若年者】 ・チームを応援したい、チームに関わりたいという気持ち	・個人的な事情にあまり影響を受けないこと ・「ボランティア」という存在自体にモチベーションを持っていること ・チームを応援している、支えているという実感	・チームやフロントとのつながりを持ちたいという気持ち ・チームを良くしたい、存続させたいという気持ち	・チームとボランティアとの一体感 ・ボランティア活動に対する達成感	・ボランティア同士のコミュニティに入るかどうか ・チーム担当者とのコミュニケーション
チーム	仙台	新潟	富山	埼玉	東京

【ウェスタン・カンファレンス】

チーム	大阪	高松	福岡	大分	琉球
ボランティア数(人)／試合	6	2	15	18	17.3
業務	会場設営、チケットもぎり、半券集計、誘導案内、チラシ等の配布・準備、会場清掃、会場撤収	会場設営、誘導案内、会場撤収	会場設営、チケットもぎり、半券集計、誘導案内、入場者カウント、身体障害者の誘導案内、会場清掃、会場撤収	チケットもぎり、半券集計、誘導案内、チラシ等の配布・準備、入場者カウント、ピン缶等持ち込み禁止物対応、身体障害者の誘導案内、会場清掃	会場設営、テーブルオフィシャル、誘導案内、チラシ等の配布・準備、身体障害者の誘導案内、会場清掃、会場撤収、チームインフォメーションブース、bjTV

募集方法	ボランティア参加者の紹介・ロコミ、教育機関(大学・専門学校等)への依頼、関係者の知人への依頼	チームのホームページでの告知	チームのホームページでの告知、ボランティア参加者の紹介・ロコミ	チームのホームページでの告知、ボランティア参加者の紹介・ロコミ、教育機関(大学・専門学校等)への依頼	チームのホームページでの告知、ボランティア参加者の紹介・ロコミ、関係者の知人への依頼
説明会の頻度と対象者	なし	シーズンを通してボランティアを依頼していないので、オリエンテーションは実施していない	シーズン当初に説明会を実施し、後はその都度現場で説明	基本的には毎月1回のボランティア会議を開催、シーズン終了後のボランティア懇親会。不定期開催の親睦会	1シーズンごとに参加者全員を対象に開催
待遇	交通費(参加者全員一律の金額)、食事(現物支給)	食事(現物支給)、ユニフォーム貸与	食事(現物支給)	食事(現物支給)、ユニフォーム貸与、試合のチケット	食事(現物支給)
施策	活動時のチーム代表挨拶、割引チケットプレゼント		活動時のチーム代表挨拶	活動時のチーム代表挨拶、ボランティアリーダーの育成、感謝状、表彰制度、食事会(懇親会)、選手との交流会、ユニフォームの製作、マスコミへの露出、物品の支給(チーム会報誌)	食事会(懇親会)、選手との交流会、名札・名刺・登録証の発行
チーム	大阪	高松	福岡	大分	琉球
活動継続性の重要度	5	3	5	5	5
活動継続性の重要度の理由	・限られた予算での運営において、ボランティアをどれだけ集められるかが、運営経費の削減につながるため	・ボランティアを募ることは地域密着や運営経費削減の視点から重要だが、ブースターがボランティアになった場合、チケット代の減収や、会場運営に対する意見がチームと対立するリスクがあるため	・会場設営等ボランティアの支援なしでは運営が困難なため	・会場運営のスタッフとしてボランティアが不可欠であるため ・球団支援の志を持ったボランティアがブースターに何らかの影響を及ぼすと考えられるため	・試合運営の経費削減だけでなく、地域とのつながりのため ・沖縄の県民性とチームのホスピタリティが一致するため
活動継続のための施策やその効果	・ボランティアとのコミュニケーション・選手と写真会実施(ホーム開催の最終試合にて)			・シーズン終了後にボランティアとの交流感謝祭を実施。 ・選手によるボランティアへのサンクスレター →ボランティアメンバーの登録継続や募集活動に良い効果をもたらす →ボランティアの意識の高揚にもつながる	・不定期ではあるが、普段からメール、電話、食事会などなコミュニケーションを取っている ・試合の時にはある程度、ボランティアの業務に責任を持たせ、キングスの一員としてやりがいを感じてもらえるようにしている
長期継続者と短期脱退者の差異	・バスケットボールに対する思い ・長時間労働を受容できるかどうか		・ボランティア活動への理解や参加目的	・長時間の拘束に対する受容 ・ボランティア内での人間関係 ・チーム側とのコミュニケーション ・個人的な事情	・個人のホスピタリティ精神 ・チームやバスケットボールへの愛情 ・週末が空けられるライフスタイル

活動継続に影響を与え られる要因	・バスケットボール に対する気持ち		・ボランティア活動 を通じて、存在感、 充実感を得ること	・魅力あるチーム 経営・チームの活 性化 ・チーム担当者 とのコミュニケーション	・チーム及びフロン トの魅力・業務の やりがい ・コミュニケーション (チーム関係者と のつながり)
チーム	大阪	高松	福岡	大分	琉球

第3項 活動継続意欲に関わる要因の選定

予備調査においては、活動継続意欲に関わる要因として、生活状況や余暇時間などのボランティアの基本的属性に関するものや参加動機、チーム・選手に対する愛着、ボランティア同士またはチームとのコミュニケーション、業務のやりがいなどが挙げられた。それらのうち、チームや選手に対する愛着は参加動機や満足の原因、ボランティア同士またはチームとのコミュニケーション、業務のやりがいなどは満足の原因としてそれぞれ項目を作成した。

これらの予備調査の結果と先行研究の検証を踏まえて、本研究では活動継続意欲になんらかの影響を持つと考えられる要因として、「参加動機」、「満足」、「組織コミットメント」の3つを選定し、活動継続意欲との関連を検証する。加えて、「基本的属性」、「ボランティア活動」、「スポーツ・運動活動」の3要因を設定し、それぞれの項目ごとに活動継続意欲を比較した。

さらに、ボランティアが活動に参加する際の自己負担金額に注目し、ボランティアが許容できる自己負担金額の上限が高いほど、活動継続意欲が高いのではないかと推測した。したがって、ボランティアが活動に参加する際の「許容できる自己負担金額」を測定する項目を作成し、活動継続意欲との関連を検討した。

第5節 調査項目の決定

第1項 基本的属性

ボランティアの基本的属性を把握するため、先行研究を参考に、「性別」、「年齢」、「職業」、「最終学歴」の4項目を設定した。

第2項 ボランティア活動

ボランティア活動の現状を把握するため、「所属チーム」、「情報入手経路」、「活動開始時期」、「活動回数」、「業務」、「自己負担金額」の7項目を設定した。「情報入手経路」は、予備調査2で用いた「募集方法」の項目に対応するように作成したものに加え、教育機関での情報の掲示と、授業やプログラムの一環としての参加を分けるため「学校の授業やプログラム」という選択肢を追加した。「業務」の項目は、予備調査2の「業務」の項目において、「その他」として回答があった業務を参考にし、「関係者・報道受付」、「チケット販売」、「総合案内」、「ブースタークラブ対応」、「イベント補助」、「ゴミ回収」の6つを選択肢に加えた。

第3項 スポーツ・運動活動

ボランティアのこれまでのバスケットボールやその他のスポーツ・運動に関する経験を把握するため、先行研究を参考に、「バスケットボール経験」、「バスケットボール実施頻度」、「スポーツ・運動経験」、「スポーツ・運動実施頻度」、「身近なバスケットボール実施者」の5項目を作成した。「バスケットボール経験」と「スポーツ・運動経験」は、これまでの経験の有無を尋ね、経験があると答えた場合のみ「バスケットボール実施頻度」と「スポーツ・運動実施頻度」への回答を求めた。「バスケットボール実施頻度」と「スポーツ・運動実施頻度」は「1. 週3回以上」から「5. 全くしていない」の5段階尺度で現在の実施頻度を尋ねた。

第4項 参加動機

ボランティアの参加動機を把握するため、松本(1999)¹²⁾が用いた参加動機項目を参考に30項目を作成した。項目の選択は、同じく松本(1999)¹²⁾の参加動機項目の因子分析結果から、因子負荷量が.50以上の項目を中心に行い、そこから、本調査のボランティアの特性を考慮して一部項目を削除し、さらに因子負荷量の低い数項目を追加した。なお、項目中の語句は、bjリーグでのボランティアに関するワーディングに修正し使用した。さらに、予備調査1、予備調査2の結果を参考に、「バスケットボールやスポーツの普及に貢献したいから」、「チームの運営に役立ちたいから」、「チームの活動を盛り上げたいから」、「何らかの形でチームにかかわりたいから」、「チームの勝利に貢献したいから」、「チームのスタッフと交流することができるから」、「チームの理念に共感したから」の7項目を作成した。

以上の計 37 項目について、無作為に項目の順序を決定し、「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの 5 段階リッカート尺度にて測定し、それぞれ順に 1 から 5 の得点を与えて数量化した。

第 5 項 満足

満足は活動満足と施策満足の 2 つに分類し、作成した計 22 項目について、「1. 非常に不満」から「5. 大変満足」までの 5 段階リッカート尺度に加え、チームによって施策に差異があることを考慮し、「0. 知らない、経験がない、わからない」を追加した 6 段階の尺度にて測定した。「1. 非常に不満」から「5. 大変満足」までの 5 段階リッカート尺度には、それぞれ順に 1 から 5 の得点を与えて数量化し、「0. 知らない、経験がない、わからない」を選択した場合は、欠損値として扱うこととした。

1. 活動満足

ボランティア活動に対する満足を把握するため、桜井(2007)^{17B)}が用いた「状況への態度要因」を構成する項目についての質問を参考に、b j リーグでのボランティアに関するワーディングに修正し、9 項目を作成し、活動満足を構成するものとした。

2. 施策満足

チームのボランティア施策に対する満足を把握するため、予備調査 2 の「施策」の項目で用いた選択肢から、選択されなかった「7. 慰安旅行」を除いた 10 項目に対応する項目をそれぞれ作成した。なお「11. 物品の支給」に対応する項目は、支給内容の記述を参考に、「チーム発行誌」と「試合のチケットの贈与」の 2 項目を作成し、計 11 項目を作成した。さらに、予備調査 2 の結果から、多くのチームが実施していることが確認された「説明会や講習会」の項目と、同じく予備調査 2 の「待遇」の項目の回答を参考に「選手との交流の機会」の 2 項目を追加した。

第 6 項 組織コミットメント

ボランティアのチームに対する組織コミットメントを把握するため、北村ら(2005)⁹⁾が用いた Organizational Commitment Questionnaire (OCQ) 15 項目を、b j リーグのボランティアに関するワーディングに修正し、それぞれ「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの 5 段階リッカート尺度にて測定し、それぞれ順に 1 から 5 の得点を与えて数量化した。なお、分析の際、組織への否定的態度を表す 6 項目に関しては、

数量化の際に得点を逆転させた。

第 7 項 活動継続意欲

ボランティアの活動継続意欲を把握するために 3 つの項目を作成した。まず、長ヶ原ら (1991)⁵⁾が用いた質問を参考に、「今後もボランティアとしてこの活動に続けて参加していきたい」という項目を作成した。加えて、独自に「どの業務になってもこの活動を続けたい」と「チームの成績が低迷してもこの活動を続けたい」の 2 項目を作成し、これらの計 3 項目で活動継続意欲を構成するものとし、「1. 非常に不満」から「5. 大変満足」までの 5 段階リッカート尺度にて測定し、それぞれ順に 1 から 5 の得点を与えて数量化した。

第 8 項 許容できる自己負担金額

ボランティアが活動に参加する際に、許容できる自己負担金額を把握するため、「今後このチームでの活動において、1 日につきいくらまでの自己負担額（交通費や食事代などの負担）であれば参加し続けますか」という質問を設定し、「1. 自己負担が必要ならば参加しない」から「5. 2,000 円以上でも参加する」の 5 段階尺度にて測定した。

第 6 節 本調査 1

調査期間は 2008 年 11 月から 2008 年 12 月までの期間で、その間の各チームのホーム開催の試合に参加したボランティアを対象に調査を実施した。なお、埼玉は諸事情により、調査を行うことが不可能であったため、本調査 1 では埼玉を除く 11 チームのボランティアを対象に調査を行った。本調査を実施するにあたり、各チームの担当者に対して、それぞれ本調査の説明を行い、調査実施日の調整を行った。さらに、ボランティアの参加予定人数を聞き、質問紙を送付した。質問紙は、返信用封筒に切手を添付し、質問紙と調査依頼文及び粗品を封入した状態で送付した。質問紙の配布は試合終了後にチームの担当者が行い、ボランティアが帰宅後に回答し、同時に配布された返信用封筒にて郵送する方法で質問紙の回収を行った。なお、同封の調査依頼文には、帰宅してから記入することと、配布されてから 5 日以内に投函することを注記した。質問紙の配布部数は、各チームの担当者に再度連絡し把握した。合計 179 部を配布し、回収数は 102 部（回収率 57.0%）、有効回答数は 99 部（有効回答率 97.1%）であった。なお、サンプルの重複を避けるため、各

チームの担当者には2日間の試合開催日のうち、2日目に参加したボランティアのみを対象に配布するように事前に依頼しておいたが、サンプル数の確保のため両日配布したチームや、2週4試合にわたり配布したチームがある。

第7節 本調査2

本調査2は2008年12月13日(土)・14日(日)の2日間にわたって実施し、滋賀の試合会場にて、参加したボランティアを対象に介入実験調査を実施した。本調査1のサンプルの分析から、介入する要素を「選手との交流」とし(詳細は第3章にて記述)、チームに調査の趣旨を説明し協力を得て、2日間それぞれ試合終了後にボランティア全員が集合する場において、数名の選手が活動に対してのお礼や感謝の言葉を伝え、ボランティア全員に握手またはハイタッチをしていくという機会を設けた。参加した選手は1日目が2人、2日目が5人であった。その後ボランティアには、解散前に本調査1で用いた質問紙と粗品を配布し、その場で回収した。実験での変化を検証するため、質問紙には本調査1で質問紙に回答したかどうかを問うチェック欄を設けて配布した。また、2日とも参加するボランティアについては、2日目に調査表を配布し回収した。回収数は1日目が6部、2日目が20部の計26部で、有効回答率は100%であった。調査時の会場は、滋賀が中心的に興行を行っている地域から離れていたため、初めて参加するボランティアが多く、回収したサンプルのうち、本調査1でも回答していたのは4人で、うち記名があり質問紙が特定できるのは1人のみであった。

第8節 分析方法

第1項 活動継続意欲に関わる変数の抽出

まず、本研究の従属変数である活動継続意欲を構成する3項目の得点を単純加算平均して合成し、活動継続意欲変数の得点を算出した。次に独立変数である3要因を示す得点の算出を行った。参加動機項目については因子分析を行い、抽出された因子の下位尺度得点を項目平均値から算出し、変数の得点を算出した。次に満足項目については、活動満足項目と施策満足項目に分け、因子分析を行って因子を抽出し、同じように下位尺度得点から

変数の得点を算出した。最後に組織コミットメントを構成する 15 項目については、活動継続意欲と同様に、得点を単純加算平均し、組織コミットメント変数を示す得点を算出した。

第 2 項 活動継続意欲の規定要因の検証

抽出された独立変数と活動継続意欲に対してピアソンの相関分析を行い、全体の関連を確認するために相関マトリックスを作成した。さらに、活動継続意欲に対して 5 % 水準で有意な相関が見られた変数を抽出し、それらの変数を独立変数、活動継続意欲を従属変数とする重回帰分析を行い、活動継続意欲に対する各変数の規定力を検討した。

第 3 項 活動継続意欲の規定要因の実践的検証

分析により抽出された活動継続の規定要因のうちマネジメントが可能な要因について、その結果と実現可能性を考慮し、介入する要素を決定し、実験を行った。本調査 1 と本調査 2 の両方に回答したサンプルは少数であり、しかも同一人物と特定できるのは 1 人であったため、同一サンプルでの実験前後の統計的な比較は不可能であった。そのため、活動継続意欲に関わる変数の平均値について、調査 1 の滋賀のサンプルと本調査 2 のサンプルの比較を行い、その結果から介入実験による変化を検証した。

第3章 結果と考察

第1節 活動継続意欲に関わる変数の抽出

第1項 本調査1のサンプルの属性

1. 基本的属性

性別では女性が 56.6%とやや多かった。年齢では、40 歳代が 25.3%と最も多いが、20 歳代、30 歳代、50 歳代と幅広い分布が見られた。職業は会社員が最も多く 44.4%と約半数を占めた。最終学歴では、高校が 39.4%、大学が 32%と大きく2つに分かれた。本研究のサンプルの特徴として、平日は仕事をし、試合のある週末にボランティアに参加している人が多いことが推測される。

表3: 基本的属性(本調査1)

	n	%		n	%
性別			職業		
男性	42	42.4	会社員	44	44.4
女性	56	56.6	団体職員	3	3
NA.	1	1	公務員	6	6.1
			自営業	6	6.1
年齢			主婦	6	6.1
10歳代	4	4	パート・アルバイト	11	11.1
20歳代	22	22.2	学生	11	11.1
30歳代	22	22.2	退職者・無職	8	8.1
40歳代	25	25.3	その他	3	3
50歳代	16	16.2	NA.	1	1
60歳代	7	7.1			
70歳代以上	3	3	最終学歴		
			中学校	3	3
			高校	39	39.4
			専門学校	9	9.1
			短大・高専	11	11.1
			大学	32	32.3
			大学院	1	1
			NA.	4	4

2. ボランティア活動

所属チームでは、「仙台」が 25.3%と最も多く、次いで「大分」が 20.2%、「福岡」14.1%、「富山」13.1%と続いた。なお、「新潟」と「大阪」のサンプルは回収できなかった。情報入手経路は「チームのホームページ」が 36.4%であり、積極的に情報を得て参加する傾向が見られた。次に「新聞、雑誌での告知」と「関係者からの依頼」が 16.2%と同じ割合で多く、依頼されて参加すること多いことが見てとれる。活動開始時期に関しては

「2008-2009 シーズン」と今シーズンが 35.4%で最も多い。「2006-2007 シーズン」が少ないが、「2005-2006 シーズン」25.3%と「2007-2008 シーズン」29.3%であり差がなく、リーグ発足当初から参加している参加者も多いことが窺える。活動回数は「31 回以上」が 19.2%で最も多く、次いで「2-5 回」25.3%、「6-10 回」17.2%と続き、ベテランのグループと参加して経験の浅いグループに二分している。業務では「誘導案内」が 21.2%、「チケットもぎり」が 13.1%と多く、活動の際に人数を要する業務が多い。自己負担金額では、「1,000 円程度」が 30.3%、「500 円程度」が 24.2%、「なし」が 12.1%と 1,000 円以内の負担が大半であった。

表4: ボランティア活動(本調査1)

	n	%		n	%
所属チーム			業務		
仙台	25	25.3	会場設営	3	3
富山	13	13.1	テーブルオフィシャル	5	5.1
東京	4	4	チケットもぎり	13	13.1
浜松・東三河	13	13.1	誘導案内	21	21.2
滋賀	7	7.1	チラシ配布・準備	1	1
福岡	14	14.1	持込禁止物対応	1	1
大分	20	20.2	身体障害者誘導	1	1
琉球	3	3	グッズ等販売	4	4
情報入手経路			関係者・報道受付	5	5.1
チームのホームページ	36	36.4	チケット販売	4	4
新聞・雑誌での告知	16	16.2	総合案内	6	6.1
参加者からの紹介・口コミ	12	12.1	ブースタークラブ	6	6.1
学校での情報	1	1	イベント補助	2	2
所属団体での情報	10	10.1	ゴミ回収	4	4
関係者からの依頼	16	16.2	会場撤収	2	2
その他	7	7.1	その他	7	7.1
N.A.	1	1	N.A.	14	14.1
活動開始時期			自己負担金額		
2005-2006シーズン	25	25.3	なし	12	12.1
2006-2007シーズン	9	9.1	250円程度	10	10.1
2007-2008シーズン	29	29.3	500円程度	24	24.2
2008-2009シーズン	35	35.4	1,000円程度	30	30.3
N.A.	1	1	1,500円程度	9	9.1
活動回数			2,000円程度	6	6.1
初参加	6	6.1	2,500円程度	5	5.1
2-5回	25	25.3	3,000円以上	3	3
6-10回	17	17.2			
11-15回	7	7.1			
16-20回	8	8.1			
20-25回	9	9.1			
25-30回	8	8.1			
31回以上	19	19.2			

3. スポーツ・運動活動

バスケットボール経験があると答えたサンプルは 59.6%であり、そのうち、バスケットボール実施頻度は「全くしていない」が 36.4%、次いで「週 1 回程度」が 9.1%であった。バスケットボールの経験はあるが、現在は全くしていないというサンプルが多いことが見て取れる。スポーツ・運動経験では、85.9%と 8 割以上は経験があり、スポーツ・運動実施頻度は、「全くしていない」と「週 1 回程度」が 26.3%と同じ割合でもっとも多く、次に「1 ヶ月に 1 回程度」14.1%、「週 3 回以上」11.1%と続いた。このことから、全く運動をしていないグループと、ある程度の頻度で定期的にスポーツや運動を実施しているグループに分かれる傾向にあるといえる。身近なバスケットボール実施者では、「友人・知人」が 37.4%と 4 割弱で、「身近にいない」が 31.3%、「家族」が 16.2%であった。

表5: スポーツ・運動活動(本調査1)

n		%	n		%
バスケットボール経験			スポーツ・運動経験		
有	59	59.6	有	85	85.9
無	31	31.3	無	10	10.1
どちらともいえない	9	9.1	どちらともいえない	4	4
バスケットボール実施頻度			スポーツ・運動実施頻度		
週3回以上	4	4	週3回以上	11	11.1
週1回程度	9	9.1	週1回程度	26	26.3
1ヶ月に1回程度	6	6.1	1ヶ月に1回程度	14	14.1
半年に1回未満	4	4	半年に1回未満	7	7.1
全くしていない	36	36.4	全くしていない	26	26.3
N.A.	40	40.4	N.A.	15	15.2
			身近なバスケットボール実施者		
			家族	16	16.2
			親族	5	5.1
			友人・知人	37	37.4
			近隣の住民	4	4
			たまに見かける知らない人	2	2
			身近にいない	31	31.3
			N.A.	4	4

4. 許容できる自己負担金額

許容できる自己負担金額は「1,000 円程度まで」が 44.4%ともっとも高い割合を示し、続いて「2,000 円以上でも参加する」が 19.2%、「500 円程度まで」が 17.2%であった。このことから 1 日あたりの自己負担金額は大半の人にとって 1,000 円以下が望ましいが、2,000 円以上の負担でも参加するというボランティアが約 2 割いることがわかる。彼らは、あるボランティア活動に相当の価値を見出して参加しているということが推測される。

表6: 許容できる自己負担金額(本調査1)

	n	%
許容できる自己負担金額		
必要なら参加しない	6	6.1
500円程度まで	17	17.2
1,000円程度まで	44	44.4
2,000円程度まで	12	12.1
2,000円以上でも参加する	19	19.2
N.A.	1	1

第2項 活動継続意欲の項目別比較

活動継続意欲の差異を検討するため、基本的属性、ボランティア活動、スポーツ・運動経験、許容できる自己負担金額のそれぞれの項目ごとに平均値を比較した。基本的属性の性別の比較のみ t 検定、その他は F 検定の有意差検定を行った。

1. 基本的属性

職業の項目で 1 %水準の有意な差が見られた。自営業が最も高い値(4.89)を示し、続いて主婦(4.72)で、最も低いのが学生(3.45)であった。学生の値が低い理由として、生活状況の変わりやすさや興味対象の多さなどが影響していると推測される。

表7: 基本的属性項目の活動継続意欲比較(本調査1)

	n	平均値	標準偏差	t値	F値
性別					
男性	42	4.25	0.90	-1.06	
女性	56	4.42	0.71		
年齢					
10歳代	4	3.42	1.17		1.34
20歳代	22	4.20	0.97		
30歳代	22	4.33	0.68		
40歳代	25	4.49	0.69		
50歳代	16	4.42	0.72		
60歳代	7	4.57	0.57		
70歳代以上	3	4.44	0.96		
職業					
会社員	44	4.35	0.76		2.97**
団体職員	3	4.33	1.15		
公務員	6	4.22	0.50		
自営業	6	4.89	0.27		
主婦	6	4.72	0.44		
パート・アルバイト	11	4.67	0.47		
学生	11	3.45	1.07		
退職者・無職	8	4.46	0.69		
その他	3	4.67	0.58		
最終学歴					
中学校	3	3.33	1.53		1.896
高校	39	4.49	0.64		
専門学校	9	4.00	1.24		
短大・高専	11	4.55	0.54		
大学	32	4.25	0.78		
大学院	1	4.00	.		

**p < .01

2. ボランティア活動

所属チームの項目に1%水準の有意な差が見られた。「琉球」はとりうる最高値(5.00)であり、「琉球」の3つのサンプルが活動継続意欲の項目すべてに最高点をつけたことが窺える。そのほかでは「福岡」が4.74、「大分」が4.52、「仙台」が4.47と高い値を示した。最も「低いのは「東京」(2.75)であり、チーム間の差が窺える。

表8: ボランティア活動項目の活動継続意欲比較(本調査1)

表3. ホームページ活動項目の活動継続意欲比較(本調査1)					表4. ホームページ活動項目の活動継続意欲比較(本調査2)				
	n	平均値	標準偏差	F値		n	平均値	標準偏差	F値
所属チーム					業務				
仙台	25	4.47	0.66	4.69**	会場設営	3	3.67	1.53	2.70**
富山	13	4.15	1.04		テーブルオフィシャル	5	3.87	0.30	
東京	4	2.75	0.88		チケットもぎり	13	4.33	0.64	
浜松・東三河	13	4.10	0.71		誘導案内	21	4.43	0.76	
滋賀	7	4.05	0.59		チラシ配布・準備	1	5.00	.	
福岡	14	4.74	0.45		持込禁止物対応	1	5.00	.	
大分	20	4.52	0.66		身体障害者誘導	1	3.67	.	
琉球	3	5.00	0.00		グッズ等販売	4	5.00	0.00	
情報入手経路					関係者・報道受付	5	4.80	0.45	
チームのホームページ	36	4.31	0.89	0.44	チケット販売	4	3.67	1.05	
新聞・雑誌での告知	16	4.54	0.65		総合案内	6	4.56	0.46	
参加者からの紹介・口コミ	12	4.14	0.95		ブースタークラブ	6	4.67	0.42	
学校での情報	1	4.67	.		イベント補助	2	2.17	0.24	
所属団体での情報	10	4.53	0.55		ゴミ回収	4	4.33	0.82	
関係者からの依頼	16	4.31	0.74		会場撤収	2	5.00	0.00	
その他	7	4.24	0.79		その他	7	4.00	0.84	
活動開始時期					自己負担金額		4.31	0.81	
2005-2006シーズン	25	4.59	0.58	1.45	なし		4.00	1.05	
2006-2007シーズン	9	4.37	0.70		250円程度	12	4.47	0.67	
2007-2008シーズン	29	4.37	0.88		500円程度	10	4.39	0.66	
2008-2009シーズン	35	4.16	0.85		1,000円程度	24	4.41	0.77	
参加回数					1,500円程度	30	4.70	0.51	
初参加	6	4.11	0.93	0.83	2,000円程度	9	3.89	0.86	
2-5回	25	4.08	0.95		2,500円程度	6	4.07	1.23	
6-10回	17	4.41	0.75		3,000円以上	5	4.44	0.96	
11-15回	7	4.62	0.52		合計	3	4.34	0.79	
16-20回	8	4.38	0.68						
20-25回	9	4.26	1.00						
25-30回	8	4.38	0.52						
31回以上	19	4.58	0.69						

**p<.01

3. スポーツ・運動活動

バスケットボール実施頻度の項目に5%水準で有意な差が確認された。「1ヶ月に1回程度」の4.78が最も高く、最も低いのは「週3回以上」の3.42、次いで低いのが「週1回程度」の3.70であった。ある程度頻繁にバスケットボールを行っているグループの活動継続意欲が低いという傾向が見られた。この結果から理由を推察するのは困難であるが、頻繁にバスケットボールを行う人は、ボランティアとして支えるよりも、自らが行うことにより面白さを覚えるという理由も考えられる。

表9:スポーツ・運動活動項目の活動継続意欲比較(本調査1)

	n	平均値	標準偏差	F値
バスケットボール経験				
有	59	4.24	0.81	1.15
無	31	4.46	0.81	
どちらともいえない	9	4.56	0.55	
バスケットボール実施頻度				
週3回以上	4	3.42	1.03	3.50*
週1回程度	9	3.70	0.99	
1ヶ月に1回程度	6	4.78	0.40	
半年に1回未満	4	4.58	0.63	
全くしていない	36	4.34	0.70	
スポーツ・運動経験				
有	85	4.34	0.79	0.57
無	10	4.50	0.67	
どちらともいえない	4	4.00	1.19	
スポーツ・運動実施頻度				
週3回以上	11	4.48	0.67	0.17
週1回程度	26	4.31	0.92	
1ヶ月に1回程度	14	4.43	0.73	
半年に1回未満	7	4.29	1.11	
全くしていない	26	4.29	0.68	
身近なバスケットボール実施者				
家族	16	4.44	1.06	0.60
親族	5	4.60	0.43	
友人・知人	37	4.22	0.77	
近隣の住民	4	4.67	0.67	
たまに見かける知らない人	2	3.83	0.24	
身近にいない	31	4.39	0.79	

* p < .05

4. 許容できる自己負担金額

許容できる自己負担金額については、1%水準で有意な差が見られた。もっとも高い値を示したのは「2,000円以上でも参加する」(4.56)で、続いて「2,000円程度まで」(4.45)、「1,000円程度まで」(4.41)、「500円程度まで」(4.29)で、もっとも低いのは「必要なら参加しない」(2.94)であった。このことから、許容できる自己負担金額と活動継続意欲の間には正の相関関係があることが窺える。

表10:許容できる自己負担金額項目の活動継続意欲比較(本調査1)

	n	平均値	標準偏差	F値
許容できる自己負担金額				
必要なら参加しない	6	2.94	1.00	6.274**
500円程度まで	17	4.29	0.55	
1,000円程度まで	44	4.41	0.71	
2,000円程度まで	12	4.45	0.85	
2,000円以上でも参加する	19	4.56	0.71	

** p < .01

第3項 活動継続意欲

活動継続意欲を構成する3項目の平均値は、「今後もボランティアとしてこの活動に続けて参加していきたい」が4.40、「どの業務の担当になってもこの活動を続けたい」が4.18、「チームの成績が低迷してもこの活動を続けたい」が4.43であり、「どの業務の担当になってもこの活動を続けたい」がやや低い値を示した。ボランティアが活動を継続するかどうかは、チームの成績より、自らが担当する業務から影響を受けることが推測できる。次に、項目の合成は、3項目の得点を単純加算平均して行い、活動継続意欲変数を示す得点を算出した。また、3項目の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ0.839と十分な値が得られた。

表11: 活動継続意欲の平均値

活動継続意欲項目	平均値	標準偏差
今後もボランティアとしてこの活動に続けて参加していきたい	4.40	0.90
どの業務の担当になってもこの活動を続けたい	4.18	0.99
チームの成績が低迷してもこの活動を続けたい	4.43	0.83
活動継続意欲全体	4.34	0.79
$\alpha = 0.839$		

第4項 因子分析による参加動機の構成因子の抽出

1. 因子分析による因子の抽出

参加動機の構成要素を抽出するため、参加動機を構成する37項目のうち、天井効果とフロア効果の見られた9項目を除外した28項目に対して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値1.0以上、因子負荷量.50以上を基準として因子の抽出を試みた。その結果、5因子が抽出され、累積寄与率は58.3%と全分散の約6割が説明された。また、抽出された因子の内的整合性を検討するため、因子ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子から第4因子までは.781から.858の十分な値が得られたが、第5因子については.622と他に比べて低い値が算出された。「知人や友人に誘われたから」の項目を削除すると、 α 係数は.713となるが、この項目を削除して因子分析を再度行くと、5因子構造が崩れてしまうため、削除せず項目を採用することとした。

2. 因子の命名

(1) 第1因子：選手・スタッフ交流動機（固有値6.828、寄与率30.7%）

第1因子は6項目で構成されており、選手への関心や支援、共感、交流とスタッフとの

交流に関する項目で構成されていることから、「選手・スタッフ交流動機」因子と命名した。

(2) 第2因子：利他・地域貢献動機（固有値 2.894、寄与率 12.0%）

第2因子は5項目で構成されており、チームの理念や地域社会、さらにボランティアや人に役立つ活動など、地域貢献や利他的な項目でまとめられることから、「利他・地域貢献動機」因子と命名した。

(3) 第3因子：自己成長動機（固有値 1.991、寄与率 7.3%）

第3因子は4項目で構成されており、新しい知識や経験の獲得、自身の成長や社会的な視野など、自身の成長に関する内容の項目で構成されていることから「自己成長動機」因子と命名した。

(4) 第4因子：社会交流動機（固有値 1.393、寄与率 4.5%）

第4因子は3項目で構成されており、人との出会いや異なる年齢の人との協働など、人との交流に関する項目で構成されていることから、「社会交流動機」因子と命名した。

(5) 第5因子：自己承認動機（固有値 1.203、寄与率 3.9%）

第5因子は5項目で構成されており、他者に認められることや、それによる存在感の獲得などの項目が高い負荷量を示したことから「自己承認動機」因子と命名した。

3. 因子構造の考察

参加動機では、選手・スタッフ交流動機因子の寄与率が 30.7%と高い値を示し、プロスポーツのボランティア特有の選手への関心からくる参加動機が浮き彫りになった。その他の因子は利他的な動機や自己の成長、人との交流など、ボランティアに関する先行研究で指摘された動機を示す因子が抽出された。利他・地域貢献動機因子にはチームの理念への共感に対する項目が含まれており、bjリーグの地域密着という理念が、ボランティアの地域に対する貢献の動機と合致している現われといえよう。

表12:参加動機因子分析結果

表12. 参加動機因子分析結果					
参加動機項目・因子名	因子負荷量	共通性	固有値	寄与率	α
第1因子【選手・スタッフ交流動機】					
選手に関心があるから	.875	.830	6.828	30.7	.858
選手との気持ちを共感したいから	.757	.596			
選手の活動を支援したいから	.678	.693			
選手と交流することができるから	.646	.487			
社会の一員として当然と思ったから	.632	.564			
チームのスタッフと交流することができるから	.631	.511			
第2因子【利他・地域貢献動機】					
チームの理念に共感したから	.378	.457	2.894	12.0	.798
活動を通して地域社会の役に立ちたいから	.806	.745			
ボランティア活動に興味があるから	.686	.586			
他の人の役に立ちたいから	.580	.619			
人から喜んでもらえたり、感謝されるような活動がしたいから	.571	.503			
第3因子【自己成長動機】					
新しい知識や経験を得たいから	.740	.587	1.991	7.3	.782
自分自身が成長したいから	.593	.625			
社会的な視野を広げるために重要だから	.588	.466			
プロスポーツにかかわりたいから	.569	.452			
第4因子【社会交流動機】					
いろいろな人と出会いたいから	.717	.754	1.393	4.5	.781
友人をつくりたいから	.697	.577			
異なる年齢の人たちと一緒に何かする機会になるから	.511	.592			
第5因子【自己承認動機】					
他の人から認められたいから	.732	.627	1.203	3.9	.622
自分の存在感を得たいから	.619	.631			
知人や友人に誘われたから	.558	.351			
主因子分析、バリマックス回転、固有値1.0以上、因子負荷量.500以上			累積寄与率 58.3		

第5項 因子分析による活動満足の構成因子の抽出

1. 因子分析による因子の抽出

活動満足の構成要素を抽出するため、活動満足を構成する9項目に対して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値 1.0 以上、因子負荷量.50 以上を基準として因子の抽出を試みた。また、活動満足の項目では、天井効果やフロア効果は見られなかった。因子分析の結果、3 因子が抽出され、累積寄与率は 61.4%と全分散の約 6 割が説明された。抽出された因子の内的整合性を検討するため、因子ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、第 1 因子は.879 の十分な値が得られたが、第 2 因子は.699、第 3 因子については.719 と.750 を下回る値が算出された。しかし、第 2 因子、第 3 因子ともに、どの項目を削除しても α 係数の値は上がらないため、そのまま項目を採用することとした。

2. 因子の命名

(1) 第 1 因子：スタッフ交流満足（固有値 3.616、寄与率 23.0%）

第 1 因子は 2 項目で構成されており、チームのスタッフとの交流を示す内容の項目で構成されていることから「スタッフ交流満足」因子と命名した。

(2) 第 2 因子：自己効用感満足（固有値 1.301、寄与率 20.9%）

第2因子は3因子から構成されており、地域社会やチームの役に立っているという実感の項目の負荷量が大きいため、「自己効用感満足」因子と命名した。

(3) 第3因子：ボランティア集団性満足（固有値 1.110、寄与率 17.4%）

第3因子は3項目から構成されており、ボランティア同士のコミュニケーションや一体感を示す内容の項目でもとめられることから、「ボランティア集団性満足」因子と命名した。

3. 因子構造の考察

活動満足では、チームのスタッフに関わる因子が寄与率 23.0%で第1因子として抽出された。b j リーグにおいては多くのチームで、スタッフがボランティアの業務を指揮しているため、彼らとのやりとりに対する満足が活動満足の重要な要素となると考えられる。さらに、自己効用感満足因子も 20.9%の寄与率を占め、自分が役に立っていると実感することが満足につながることを示唆された。

表13:活動満足因子分析結果

活動満足項目・因子名	因子負荷量	共通性	固有値	寄与率	α
第1因子【スタッフ交流満足】					
チームのスタッフからの個人的な気遣い	.898	.891	3.616	23.0	.879
チームのスタッフとのコミュニケーション	.811	.713			
第2因子【自己効用感満足】					
地域社会の役に立っているという実感	.818	.683	1.301	20.9	.699
チームの役に立っているという実感	.608	.433			
業務のやり方や内容が効果的・効率的であること	.559	.519			
第3因子【ボランティア集団性満足】					
ボランティア参加者からの個人的な気遣い	.662	.573	1.110	17.4	.719
ボランティア同士の人間関係	.635	.434			
チームやボランティアの一体感	.619	.664			
主因子分析、バリマックス回転、固有値1.0以上、因子負荷量.500以上			累積寄与率 61.4		

第6項 因子分析による施策満足の構成因子の抽出

1. 因子分析による因子の抽出

施策満足の構成要素を抽出するため、施策満足を構成する 13 項目に対して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値 1.0 以上、因子負荷量.50 以上を基準として因子の抽出を試みた。なお、施策満足の項目でも、天井効果やフロア効果は見られなかった。因子分析の結果、3 因子が抽出され、累積寄与率は 61.7%で全分散の約 6 割が説明された。なお因子の内的整合性を検討するため、因子ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子が.807、第2因子が.780、第3因子が.756 と十分といえる値が算出された。

2. 因子の命名

(1) 第1因子：選手交流満足（固有値 4.729、寄与率 21.7%）

第1因子は3項目から構成されており、選手との交流会や食事会の項目で構成されていることから「選手交流満足」因子と命名した。

(2) 第2因子：感謝・活動サポート満足（固有値 1.581、寄与率 20.4%）

第2因子は5項目から構成されており、表彰制度や感謝状などのボランティアへの感謝を示す内容の項目と、リーダーの育成や、ユニフォーム、講習会などボランティアの活動をサポートする施策に関する項目で構成されていることから「感謝・サポート満足」因子と命名した。

(3) 第3因子：活動情報発信満足（固有値 1.506、寄与率 19.7%）

第3因子は3項目から構成されており、メディアへの露出や、発行誌など情報を発信する媒体に関する項目で構成されていたため「活動情報発信満足」因子と命名した。

3. 因子構造の考察

施策満足では選手との交流の機会に関する因子が 21.7%の寄与率を占めた。参加動機の実験結果からも推察されるように、選手の支援や交流が活動参加の主要な動機となっているため、選手との交流の場に対する満足は、当然施策満足の大きく影響するであろう。

表14: 施策満足因子分析結果

表14. 施策満足因子分析結果						
施策満足項目・因子名	因子負荷量	共通性	固有値	寄与率	α	
第1因子【選手交流満足】						
選手との交流会	.949	.983	4.729	21.7		.807
食事会(懇親会)	.722	.626				
選手との交流の機会	.528	.353				
第2因子【感謝・活動サポート満足】						
表彰制度	.748	.598	1.581	20.4		.780
感謝状	.716	.587				
ボランティアリーダーの育成	.624	.497				
ボランティアのユニフォーム	.531	.571				
説明会や講習会	.513	.526				
第3因子【活動情報発信満足】						
テレビや雑誌などメディアへの露出	.905	.865	1.506	19.7		.756
チーム発行誌	.714	.684				
名札・名刺・登録証	.604	.501				
主因子分析、バリマックス回転、固有値1.0以上、因子負荷量.400以上			累積寄与率	61.7		

第7項 組織コミットメント

組織コミットメントを構成する15項目の平均値を表15に示した。この15項目のうち、組織への否定的な態度を示す6項目については得点を逆転して数量化した。平均値を見ると、もっとも高いのは、「このチームから脱退しようと考えている」（逆転項目）で4.43、次いで「このチームの将来が本当に気になる」（4.09）であった。もっとも低い平均値を示したのは、「自分とこのチームの価値観がとてもよく似ていると思う」（3.15）で、「このチームでボランティアを始めたことは明らかに私の誤りだ」（逆転項目）が3.16と次に低い値を示した。この結果から、ボランティアはチームとの価値観には相違を感じるが、脱退は考えておらず、チームの将来を気にかけているという傾向があることが読み取れる。続いて、組織コミットメント変数を示す得点を算出するため、15項目の得点を単純加算平均して項目を合成した。また、活動継続意欲を構成する項目の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出したところ0.798と十分な値が得られた。

表15: 組織コミットメントの平均値

組織コミットメント項目	平均値	標準偏差
活動がうまくいくように周囲の期待以上の努力をしている	3.69	0.77
友人にこのチームのすばらしさについて興味を持つように話す	3.76	0.96
このチームへの愛着心はほとんどない	4.04	1.15
チームの活動を継続するためにどんな役割でも引き受ける	3.66	0.88
自分とこのチームの価値観がとてもよく似ていると思う	3.15	0.77
このチームのメンバーであることを他の人に話すことが誇りに感じる	3.81	0.92
このチームより他のボランティア組織のほうが活躍できる	3.59	0.96
このチームはボランティアとしての能力を十分に引き出してくれる	3.23	0.85
このチームから脱退しようと考えている	4.43	0.89
このチームのメンバーになろうと決めたことをとてもうれしく思う	4.04	0.92
漠然とこのチームに尽くしていても得られることがあまりない	3.92	1.03
このチームの活動方針にしばしば同意できないことがある	3.19	1.11
このチームの将来が本当に気になる	4.09	0.93
このチームはボランティアとして活動するための最適な団体だ	3.49	0.87
このチームでボランティアを始めたことは明らかに私の誤りだ	3.16	1.47
組織コミットメント全体	3.69	0.50
$\alpha = 0.798$		

第 8 項 抽出された活動継続意欲に関わる変数

これまでの分析から、12 の活動継続意欲に関わる変数を抽出した。

表16:活動継続意欲に関わる変数

参加動機		選手・スタッフ交流動機
		利他・地域貢献動機
		自己成長動機
		社会交流動機
		自己承認動機
満足	活動満足	スタッフ交流満足
		自己効用感満足
		ボランティア集団性満足
	施策満足	選手交流満足
		感謝・活動サポート満足
		活動情報発信満足
組織コミットメント		組織コミットメント

第 2 節 活動継続意欲の規定要因の検証

第 1 項 相関分析による活動継続意欲と相関のある変数の抽出

抽出された 12 の変数と活動継続意欲について、ピアソンの相関分析を行い、変数間の相関係数を表 17 に示した。その結果、活動継続意欲に対して 1 %水準で有意性が認められたのは、利他・地域貢献動機、自己効用感満足、組織コミットメントの 3 変数であり、選手・スタッフ交流動機、スタッフ交流満足、ボランティア集団性満足についても 5 %水準で有意性が確認された。特に組織コミットメントの相関係数は.627 で、活動継続意欲に対して強い正の相関が見られた。その他に有意性の認められた 5 つの変数については、活動継続意欲に対して弱い正の相関があった。なお、組織コミットメントについては、活動継続意欲のほかに、ボランティア集団性満足と自己効用感満足に対して強い正の相関があることがわかる。

表17:活動継続意欲に関わる変数間の相関(本調査1)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 活動継続意欲												
2. 選手・スタッフ交流動機	.238*											
3. 利他・地域貢献動機	.287**	.388**										
4. 自己成長動機	.031	.282**	.551**									
5. 社会交流動機	.154	.384**	.506**	.441**								
6. 自己承認動機	-.086	.165	.261*	.219*	.315**							
7. スタッフ交流満足	.250*	.141	.130	-.057	.145	.108						
8. 自己効用感満足	.305**	.286**	.435**	.133	.239*	.214*	.410**					
9. ボランティア集団性満足	.255*	.147	.235*	-.080	.181	.018	.462**	.461**				
10. 選手交流満足	.227	.192	.310**	.124	.293*	.107	.290*	.411**	.258*			
11. 感謝・活動サポート満足	.111	.206	.398**	.168	.292*	.200	.314*	.508**	.494**	.430**		
12. 活動情報発信満足	.075	.051	.220	-.106	.130	.297*	.155	.210	.285*	.578**	.471**	
13. 組織コミットメント	.627**	.364**	.394**	.119	.288**	-.001	.382**	.582**	.608**	.317**	.285*	.229

*p<.05,**p<.01

第2項 重回帰分析による活動継続意欲の規定要因の検証

相関分析の結果から、活動継続意欲に対して1%水準で有意性が認められた利他・地域貢献動機、自己効用感満足、組織コミットメントの3変数と、5%水準で有意性が認められた選手・スタッフ交流動機、スタッフ交流満足、ボランティア集団性満足の合計6つの変数を独立変数、活動継続意欲を従属変数として重回帰分析を行い、独立変数の活動継続意欲に対する規定力を検証した。表18は標準偏回帰係数の高い順に独立変数を並べたものである。重回帰分析の結果、組織コミットメントについて1%水準で有意性が見られ、標準偏回帰係数は.747と高い値を示した。このことから、組織コミットメントが活動継続意欲に対して強い規定力を持つことが実証された。

表18:重回帰分析結果(本調査1)

独立変数	標準偏回帰係数	単相関係数
組織コミットメント	.747**	.627**
利他・地域貢献動機	.086	.287**
スタッフ交流満足	.006	.250*
選手・スタッフ交流動機	-.075	.238*
ボランティア集団性満足	-.087	.255*
自己効用感満足	-.136	.305**
重相関係数	.642	
決定係数	.413	

*p<.05,**p<.01

第3節 活動継続意欲の規定要因の実践的検証

第1項 介入要素の選定

重回帰分析の結果から、活動継続意欲の規定要因として、組織コミットメントが抽出されたが、これは感覚的な変数であるため、介入が不可能である。そこで、相関分析の結果から介入する要素の検討を行った。活動継続意欲に対して有意な相関がみられた変数は、利他・地域貢献動機、自己効用感満足、組織コミットメント、選手・スタッフ交流動機、スタッフ交流満足、ボランティア集団性満足であった。これらの変数のうち、介入が可能と考えられるのは、選手との交流とスタッフとの交流である。本研究ではこの2つの要素に同時に介入することができなかったため、「選手との交流」を選定した。

第2項 本調査2のサンプルの属性

1. 基本的属性

性別では男性が53.8%、女性が46.2%と男性の方が多かった。年齢は20歳代が34.9%と最も多く、10歳代と30歳代は23.1%と、10歳代からの参加者の割合が高い。職業は会社員が46.2%と5割弱で、次に多いのが学生で26.9%であった。最終学歴で最も多いのは、高校と大学で同じ38.5%であり、約4割ずつでサンプルを二分した。本調査2では、若い学生のボランティアが、本調査1に比べて高い割合を占めた。

表19: 基本的属性(本調査2)

		n	%			n	%
性別				職業			
		n	%			n	%
	男性	14	53.8		会社員	12	46.2
	女性	12	46.2		公務員	5	19.2
					パート・アルバイト	1	3.8
年齢					学生	7	26.9
	10歳代	6	23.1		N.A	1	3.8
	20歳代	9	34.6				
	30歳代	6	23.1	最終学歴			
	40歳代	3	11.5		中学校	1	3.8
	50歳代	1	3.8		高校	10	38.5
	N.A	1	3.8		短大・高専	1	3.8
					大学	10	38.5
					大学院	2	7.7
					N.A	2	7.7

2. ボランティア活動

情報入手経路は、割合が高いものから順に、「関係者からの依頼」が 34.6%、「チームのホームページ」と「参加者からの紹介・口コミ」が 19.2%であった。関係者から依頼されて参加したボランティアが多いことが窺える。活動開始時期は「2008-2009 シーズン」が 88.5%と 9 割弱であったが、これは滋賀が今シーズンから b j リーグに参入したことによる。活動回数は「初参加」が 38.5%、「2-5 回」が 30.8%であり、活動開始時期と同じ理由から経験の浅いボランティアが大半である。業務は、「テーブルオフィシャル」が 15.4%と本調査 1 に比べて割合が高く、「誘導案内」が 11.5%であった。自己負担金額は「500 円程度」と「1,000 円程度」が同率の 19.2%でもっとも多く、ついで「なし」と「2,000 円程度」が 15.4%であった。本調査 1 のサンプルと比較すると、「500 円程度」と「1,000 円程度」の占める割合は低いが、「2,000 円程度」と「1,500 円程度」を負担しているサンプルの割合が高かった。

表20:ボランティア活動(本調査2)

		n	%			n	%
所属チーム				業務			
滋賀		26	100	テーブルオフィシャル		4	15.4
情報入手経路				誘導案内		3	11.5
チームのホームページ		5	19.2	チラシ配布・準備		1	3.8
新聞・雑誌での告知		3	11.5	入場者カウント		1	3.8
参加者からの紹介・口コミ		5	19.2	関係者・報道受付		1	3.8
関係者からの依頼		9	34.6	チケット販売		1	3.8
その他		3	11.5	ブースタークラブ		2	7.7
N.A.		1	3.8	その他		4	15.4
				N.A.		9	34.6
活動開始時期				自己負担金額			
2007-2008シーズン		3	11.5	なし		4	15.4
2008-2009シーズン		23	88.5	250円程度		3	11.5
活動回数				500円程度		5	19.2
初参加		10	38.5	1,000円程度		5	19.2
2-5回		8	30.8	1,500円程度		3	11.5
6-10回		3	11.5	2,000円程度		4	15.4
11-15回		1	3.8	2,500円程度		1	3.8
16-20回		2	7.7	3,000円以上		1	3.8
25-30回		1	3.8				
N.A.		1	3.8				

3. スポーツ・運動活動

バスケットボールの経験があるのは 65.4%であった。バスケットボールの実施頻度では「全くしていない」が、26.9%、「週3回以上」と「週1回程度」がともに 11.5%であった。スポーツ・運動経験があるのは 80.8%であり、スポーツ・運動実施頻度は「全くしていない」が 26.9%と最も多く、「週3回以上」と「週1回以上」、「半年に1回未満」が 15.4%であった。バスケットボールとスポーツ・運動においては、本調査1に比べ、どちらも「週3回以上」実施しているサンプルが多かった。身近なバスケットボール実施者は「友人・知人」が 61.5%と6割を占め、次いで「身近にいない」が 23.1%であった。

表21:スポーツ・運動活動(本調査2)

		n	%			n	%
バスケットボール経験				スポーツ・運動経験			
有		17	65.4	有		21	80.8
無		7	26.9	無		3	11.5
どちらともいえない		2	7.7	どちらともいえない		1	3.8
				N.A.		1	3.8
バスケットボール実施頻度				スポーツ・運動実施頻度			
週3回以上		3	11.5	週3回以上		4	15.4
週1回程度		3	11.5	週1回程度		4	15.4
1ヶ月に1回程度		2	7.7	1ヶ月に1回程度		3	11.5
半年に1回未満		2	7.7	半年に1回未満		4	15.4
全くしていない		7	26.9	全くしていない		7	26.9
N.A.		9	34.6	N.A.		4	15.4
				身近なバスケットボール実施者			
				家族		2	7.7
				親族		2	7.7
				友人・知人		16	61.5
				身近にいない		6	23.1

4. 許容できる自己負担金額

許容できる自己負担金額は、「1,000 円程度まで」が最も多く 34.6%であり、「2,000 円以上でも参加する」が 23.1%、「2,000 円程度まで」が 19.2%と続いた。一方最も少なかったのは「500 円程度まで」の 7.7%であった。本調査1のサンプルとの比較では、「2,000 円以上でも参加する」と「2,000 円程度まで」のサンプルが多く、「1,000 円程度まで」と「500 円程度まで」のサンプルの割合が少なかった。本調査2では、本調査1に比べ、高額な許容できるサンプルの割合が高いといえる。

表22: 許容できる自己負担金額(本調査2)

	n	%
許容できる自己負担金額		
必要なら参加しない	3	11.5
500円程度まで	2	7.7
1,000円程度まで	9	34.6
2,000円程度まで	5	19.2
2,000円以上でも参加する	6	23.1
N.A.	1	3.8

第3項 活動継続意欲に関わる変数間の相関

本調査2のサンプルに対しても、抽出された12の変数と活動継続意欲について、ピアソンの相関分析を行い、変数間の相関係数を表23に示した。選手・スタッフ交流動機、利他・地域貢献動機、自己成長動機、社会交流動機、スタッフ交流満足、自己効用感満足、組織コミットメントの7変数について、活動継続意欲との相関に1%水準で有意性が認められ、強い正の相関が見られた。そのほか、ボランティア集団性満足も5%水準で有意な相関が確認された。

表23: 活動継続意欲に関わる変数間の相関(本調査2)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 活動継続意欲												
2. 選手・スタッフ交流動機	.713**											
3. 利他・地域貢献動機	.674**	.730**										
4. 自己成長動機	.586**	.733**	.849**									
5. 社会交流動機	.552**	.570**	.690**	.646**								
6. 自己承認動機	.341	.658**	.501*	.568**	.240							
7. スタッフ交流満足	.539**	.385	.304	.081	.210	-.012						
8. 自己効用感満足	.554**	.598**	.473*	.374	.233	.336	.703**					
9. ボランティア集団性満足	.466*	.292	.352	.102	.177	-.005	.744**	.794**				
10. 選手交流満足	.330	.340	.199	.233	.059	.399	.438	.732**	.597*			
11. 感謝・活動サポート満足	.378	.576*	.340	.266	-.078	.556*	.559*	.912**	.740**	.892**		
12. 活動情報発信満足	.317	.430	.265	.227	-.004	.459	.496	.825**	.691**	.932**	.922**	
13. 組織コミットメント	.817**	.795**	.729**	.652**	.651**	.359	.715**	.721**	.646**	.390	.719*	.580*

*p<.05, **p<.01

第4項 活動継続意欲の規定要因の実証的検証

介入実験による変化の検証では、同一サンプル間での実験前後の比較が不可能であったため、活動継続意欲に関わる変数の平均値について、調査1の滋賀のサンプルと本調査2のサンプルの比較を行い、その結果から介入実験による変化を検証した。

t検定の結果、選手交流満足に1%水準で有意な差が見られた。平均値は、本調査1での滋賀のサンプルが1.75、本調査2でのサンプルは3.65と大きな差があった。これは介

入実験による変化であると推察される。選手交流満足を除くそのほかの 12 変数の平均値については、統計的に有意な差は見られなかったが、12 変数中 10 変数について、本調査 2 の平均値が本調査 1 の滋賀の値を上回った

表24:活動継続意欲に関わる変数の平均値比較

活動継続意欲に関わる変数	滋賀(本調査1) (n=7)		滋賀(本調査2) (n=26)		t
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
活動継続意欲	4.05	0.59	4.09	0.95	-0.11
選手・スタッフ交流動機	2.55	1.09	3.22	1.03	-1.51
利他・地域貢献動機	2.94	1.07	3.13	1.04	-0.42
自己成長動機	3.71	1.01	3.56	0.97	0.38
社会交流動機	3.33	1.45	3.36	1.02	-0.05
自己承認動機	2.24	1.05	2.55	1.07	-0.68
スタッフ交流満足	4.29	0.39	4.02	0.58	1.13
自己効用感満足	3.38	0.56	3.64	0.76	-0.84
ボランティア集団性満足	3.71	0.56	3.83	0.70	-0.39
選手交流満足	1.75	0.74	3.65	0.67	-5.04**
感謝・活動サポート満足	2.67	0.31	3.57	0.71	-2.12
活動情報発信満足	2.47	1.61	3.51	0.72	-1.41
組織コミットメント	3.70	0.32	3.63	0.63	0.27

**p<.001

第 4 節 考察

第 1 項 ボランティアの活動継続意欲の規定要因

相関分析では、利他・地域貢献動機、自己効用感満足、組織コミットメント、選手・スタッフ交流動機、スタッフ交流満足、ボランティア集団性満足の 6 変数について、活動継続意欲との有意な相関関係が認められた。次に、それらの 6 変数を独立変数、活動継続意欲を従属変数として重回帰分析を行ったところ、組織コミットメントのみに活動継続意欲への強い規定力が認められた。このことから、ボランティアが持つチームへのコミットメントが、活動継続意欲に強い影響を与えることが明らかとなった。本研究では、組織コミットメントの規定要因に関する詳細な検証は行わないが、活動継続意欲に関する変数間の相関分析の結果から、組織コミットメントに対して有意な相関が見られた、選手・スタッフ交流動機、利他・地域貢献動機、社会交流動機、スタッフ交流満足、自己効用感満足、ボランティア集団性満足、選手交流満足、感謝・活動サポート満足の 8 変数は、活動継続意欲に対して間接的な規定力を持つ可能性があると考えられる。

第2項 活動継続意欲に関わる変数の介入実験による変化

同一チームの実験前後のサンプル間の比較では、選手交流満足に有意な差が確認された。活動継続意欲を含むその他の12変数については、統計的に有意な差は認められなかったが、10変数が介入後に高い値を示した。これらは、同一サンプル間の比較ではないため、実験による変化と断定的に言及することは困難であるが、選手交流満足が向上したことが推察される。この結果について、本研究の分析結果から原因を推察すると、選手に関する変数は活動継続意欲に対して、相関はみられたものの、直接的な規定力は実証されなかったため、介入を行っても活動継続意欲に大きな変化が現れなかったということが考えられる。加えて、本研究ではサンプル全体の活動継続意欲の平均値が4.34と非常に高く、が高く、本調査1の滋賀のサンプルについても、4.05と高い値を示している。つまり、そもそも活動継続意欲が高いため、介入による影響が表れにくいと推測される。また、分析の方法については、同一サンプル間での比較ではないため、様々な要因からの影響により、実験による変化のみを測定しづらいということがある。さらに、実験の内容から考えられる原因としては、選手との交流内容が挨拶やハイタッチなど短時間で、その場のみの交流であったため、施策の効果が限定的であったことが考えられる。

しかし、12変数中10変数の値が実験後のサンプルで高かったことから、実験の効果がその10変数にも波及した可能性も考えられる。

第3項 活動継続意欲との関連が考えられる要因

本研究では、職業、所属チーム、バスケットボール実施頻度、許容できる自己負担金額により、活動継続意欲に差があることがわかった。職業では、自営業の活動継続意欲が高く、学生が低い傾向が見られた。学生は進学や就職などにより、生活状況が変わりやすい。活動の継続には生活の安定性が関わっていると推測される。所属チームによっても活動継続意欲に有意な差が見られたが、チームによって活動内容や施策が異なるため、この結果は当然といえよう。バスケットボールの実施頻度では、1ヶ月に1回程度のサンプルが高い継続意欲を示し、週1回以上頻繁に実施しているサンプルは低い傾向を示した。これに対しては、頻繁にバスケットボールを実施している人は、自らがプレーしたいという欲求が強く、さらにボランティアへの参加により、バスケットボールの実施時間が削られるため、このような傾向が示されたと推測される。許容できる自己負担金額については、金額が高いほど、活動継続意欲が高い傾向が見受けられた。しかし、自己負担が必要なら参加

しないと回答したサンプルの活動継続意欲は、ほかに比べて顕著に低く、活動継続意欲の低い人にとって、自己負担金額は活動に参加するかどうかの決定に影響を与えうる要素であることが示唆された。

第4章 結論

第1節 まとめ

本研究の目的は、b j リーグのボランティアを対象に、ボランティアの活動継続意欲に影響を与える要因を明らかにすることであった。研究の目的を達成するため、b j リーグのチームに対して質問紙調査を行い、ボランティアに対して面接調査と質問紙調査、介入実験調査を実施した。これにより、本研究では以下のことが明らかになった。

- ①相関分析の結果、選手・スタッフ交流動機、利他・地域貢献動機、スタッフ交流満足、自己効用感満足、ボランティア集団性満足、組織コミットメントの6変数において、活動継続意欲との有意な相関が見られた。
- ②ボランティアの活動継続意欲に最も強い影響を与える要因はチームへの組織コミットメントである。
- ③介入実験前語の比較の結果、選手との交流に関わる満足が統計的に優位に高く、さらに、統計的に有意ではなかったが、活動継続意欲を含む残りの12変数中10変数が介入実験後に高い値を示した。

本研究により、ボランティアのチームに対する組織コミットメントが、活動継続意欲に強い影響を与えることが証明された。これは、環境ボランティアについて、組織への帰属意識が活動継続意欲の説明因となることを示した安藤・広瀬(1999)²⁾らの結果に追従するものであり、b j リーグというプロスポーツのボランティアについても、組織コミットメントが活動継続の鍵となることが明らかとなった。

さらに、本研究では、選手との交流という要素に介入することにより、活動継続意欲の規定要因についての実証的な検証を試みた。その結果、選手との交流に関する満足の向上が見られ、さらに有意な差ではなかったが、残りの12変数中、活動継続意欲を含む10変数が実験後に高い値を示した。このことから、実験による効果が、選手との交流だけでなく、他の変数にも波及した可能性が考えられる。

第2節 活動継続意欲を高めるための方策

本研究の結果からは、選手との交流という施策の効率性について評価することはできない。しかし、選手との交流に関する満足は、組織コミットメントに影響を与える可能性があり、施策を継続して実施することによって、それに対する満足が組織コミットメントを介して、間接的に活動継続意欲に変化をもたらすということも考えられる。また、選手がボランティアに挨拶や握手などをして交流することは、チームや選手にとって負担が少なく、この施策に活動継続意欲への効果が認められれば、効率性の高い施策であるといえる。したがって、長期的な視野を持って施策を実施するとともに活動継続意欲の変化を測定し、その効率性を検討する必要がある。本研究では、選手との交流という要素を選択したが、その他にも組織コミットメントに影響があると推測される、スタッフとの交流や自己効用感、ボランティア集団性、チームからの感謝や活動サポートに関する施策の実施により、組織コミットメントの向上が見込まれ、それにより活動継続意欲が向上する可能性がある。またその際には、複数の施策を組み合わせることにより、更なる効果が期待できよう。

第3節 研究の限界と今後の課題

本研究にはいくつかの限界と今後の課題がある。第一に、質問紙の配布・回収方法である。配布方法については、チーム担当者には、2日間連続で開催される試合のうち、2日目のみの参加者に配布するように依頼したが、サンプル数を確保するため、1日目のみの参加者にも配布してもらったチームや、2週間に渡って配布してもらったチームがあり、同一チームのサンプル内でも活動日が異なる場合がある。また、記名は任意であったため、サンプルが重複している可能性も拭えない。また、回収方法については、質問紙の配布から5日以内に投函するように書面にて指示し、記入日は回答者に一任したため、活動からの経過時間は統制できていない。

第二に、チーム間の差を考慮していないことである。bjリーグでは、チームによって待遇や施策が異なり、ボランティアの活動継続意欲や満足にも大きな差異があると推測される。しかし、チーム単位では十分なサンプル数が得られなかったため、本研究では、チーム間の差を考慮に入れず、分析においてはbjリーグのボランティアとしてサンプルをまとめて扱った。そのため、質問紙配布日の試合の勝敗や、チームの順位など活動継続意

欲に影響のあると考えられる諸要素についても、検討項目に含まれていない。

第三に、ボランティアの業務である。本研究では、分析の簡素化のため、業務を単一回答法で尋ねたが、実際には大半のボランティアが複数の業務をこなしている。さらに、質問紙を配布された日の業務を尋ねたため、普段行っている業務とは異なる場合がある。

第四に、サンプルのサイズである。本研究でのサンプル数は 99 部と十分な回収数が得られず、分析結果の信頼性に懸念がある。

第五に、分析モデルである。本研究では、活動継続意欲に対する直接的な規定力に焦点をあてた。したがって、活動継続意欲を従属変数、活動継続意欲に関わる変数を独立変数とする重回帰モデルにて分析を行ったが、現実にはこれらの変数が複雑な構造で関連性を持つと考えられる。今後、変数間の関連性の構造を解明するモデルの検討が求められる。

第六に、介入実験の方法である。介入実験の方法に関しては、先行研究が見られず、模索的に実施したため、同一サンプルでの実験前後の比較ができなかった。今後、質的調査や、長期的な調査を含め、綿密な計画を立て、有用な方法を検討する必要がある。また、活動継続意欲に対して影響があると考えられる要素のうち本研究では選択しなかった「スタッフとの交流」に関しては、今後その活動継続意欲への効果の検証が求められる。

第七に、組織コミットメントに対する研究の必要性がある。本研究では、活動継続に対する組織コミットの規定力が明らかになった。しかし、本研究の定義からもわかるように、組織コミットメントは「ある組織に対する個人の同一化と関与の強さ」であり、ボランティアのマネジメントにおいては、何がその感覚に影響を及ぼすのかが重要となる。それについて、本研究における組織コミットメントと相関から、選手・スタッフとの交流に関する動機、利他や地域貢献に関する動機、他者との交流に関する動機、スタッフとの交流に関する満足、自己効用感に関する満足、ボランティア集団性に関する満足、選手との交流に関する満足、チームからの感謝や活動サポートに関する満足が、組織コミットメントに関わっている可能性が高いと考えられる。しかし、ボランティアに関する先行研究において、組織コミットメントに影響を与える要因について詳細な検討がなされているものは見られなかったため、今後研究の蓄積が急務である。

参考・引用文献

1. Abrams Dominic, Kaori Ando and Steve Hinkle: Psychological Attachment to the Group: Cross-cultural differences in organizational identification and subjective norms as predictors of workers' turnover intentions, personality & social psychology bulletin, 24(10):1027-1039, 1998
2. 安藤香織・広瀬幸雄：環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的かつ沿う継続意図の規定因，社会心理学研究，15(2)：90-99，1999
3. b j リーグ公式サイト：http://www.bj-league.com/bj/Top.do
4. b j リーグ：入場者数推移，b j リーグ内部資料
5. 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)ーボランティアの継続意欲の視点からー，鹿屋体育大学研究紀要，6:69-75，1991
6. 長ヶ原誠・山口泰雄・綿祐二・野川春夫・菊池秀夫：地域スポーツイベントにおけるボランティア活動の研究ー委託型ボランティアにおける地域団体への帰属意識と活動満足との関連性に着目してー，日本体育学会大会号，42A：146，1990
7. E. Gil Clary, Mark Snyder, Robert D. Ridge, John Copeland, Arthur A. Stukas, Julie Haugen and Peter Miene: Understanding and assessing the motivations of volunteers: a functional approach, journal of personality and social psychology, 74:1516-1531, 1998
8. 今井志保・北村尚浩・川西正志：スポーツ・ボランティアの組織コミットメントと役割満足度ースペシャルオリンピックスのボランティアに着目してー，日本体育学会大会号，54：242，2003
9. 北村尚浩・松本耕二・國本明德・仲野隆士：スポーツ・ボランティアの組織コミットメント，体育学研究，50：37-57，2005
10. Lyman W. Porter, Richard M. Steers and Richard T. Mowday and Paul V. Boulian: Organizational commitment, job satisfaction, and turnover among psychiatric technicians, Journal of Applied Psychology, 59(5):603-609, 1974
11. 松橋崇史・金子郁容：スポーツ組織マネジメントにおける地域コミュニティ戦略ーJクラブの事例研究ー，17(2)：39-55，2007

12. 松本耕二：スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究－障害者スポーツイベントのボランティアに着目して－，山口県立大学社会福祉学部紀要，5：1-19，1999
13. 松岡宏高・小笠原悦子：非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機，体育の科学，52(4)：277-284，2002
14. 文部省・スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議：スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書，2000
15. 長積仁・富山浩三・原田宗彦：総合型地域スポーツクラブ図のおかれた環境と組織行動－クラブ経営組織の環境適応行動と組織コミットメントの関係について－，徳島大学総合科学部人間科学研究，6：63-77，1998
16. 仲野隆士・松本耕二・北村尚浩・國本明德：障害者スポーツにおけるボランティアコーチの参加動機－2002 年スペシャルオリンピックス日本・夏季ナショナルゲーム選手団コーチを対象に－，日本体育学会大会号，54：241，2003
17. 桜井正成：ボランティアマネジメント，ミネルヴァ書房，(A)21-48，(B)49-68，(C)134-154，2007
18. 関本昌秀・花田光世：企業帰属意識の構造化と、影響要因の研究，産業・組織倫理学研究，1(1)：9-20，1987
19. 新出昌明：長野オリンピックにおけるボランティアの期待と満足度に関する研究，日本体育学会大会号，49：409，1998
20. 総務省：平成 18 年度社会生活基本調査，2006
21. SSF 笹川スポーツ財団：スポーツ白書，SSF 笹川スポーツ財団：87-95，2006
22. 田引俊和：知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究，医療福祉研究，1：85-93，2005
23. 東京マラソン 2009 公式サイト：<http://www.tokyo42195.org/>
24. 綿祐二・野川春夫・池田勝：障害児キャンプのボランティア指導者の継続行動に関する研究－役割葛藤とボランティア活動の継続性との関連について－，日本体育学会大会号，41A：104，1990
25. 綿祐二・山口泰雄・長ヶ原誠・野川春夫・菊池秀夫：地域スポーツイベントにおけるボランティア活動の研究－初参加者と活動継続者の継続意欲の規定要因の比較－，日本体育学会大会号，42A：442，1991
26. 山口泰雄：スポーツ・ボランティアの可能性，スポーツ・ボランティアへの招待，山

口泰雄編「スポーツ・ボランティアへの招待」，世界思想社：2-14，2004

27. 山口 泰雄・菊池 秀夫・野川 春夫：スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続要因の分析，日本体育学会大会号，40A：158，1989

付録・質問紙

b j リーグにおけるボランティアに関する調査

株式会社日本プロバスケットボールリーグ

本調査はb j リーグの各チームにおけるボランティアの現状を把握するための調査です。ご協力をお願い致します。

【ボランティア参加者の定義】

本調査ではボランティア参加者を「報酬を目的としないで、自分の労力、技術、時間を提供して、地域社会やチームのための活動に参加する人（時間給や日当などの賃金ではなく、交通費など実費負担分や昼食・ユニフォームなどの物的な提供を受けている人を含む）」と定義します。

【アルバイトスタッフの定義】

本調査ではアルバイトスタッフを「時間給または日当で給与が支払われる短期・短時間のスタッフ」と定義します。

【チーム】（ ） 【担当者】（ ）

昨シーズン（2007-2008 シーズン）のボランティア参加者、アルバイトスタッフの活動とその内容についてお聞きします。

質問1-1. 貴チームにはボランティア参加者の登録制度がありますか。当てはまるもの1つに○をつけてください。

1. ある 2. ない 3. 他の制度がある（制度名 ）
4. どちらともいえない

質問1-2. 質問1-1で【1. ある】と答えた方にお聞きします。登録制度の登録者は何人でしたか。
（ ）人

質問1-3. 質問1-1で【1. ある】と答えた方にお聞きします。登録制度の登録期間はどれだけで
したか。お書きください。

（ 例）1シーズン ）

質問1-4. ボランティア活動者の募集の際、参加回数に制限はありましたか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

1. ある 2. ない 3. どちらともいえない

質問1-5. 質問1-4で【1. ある】と答えた方にお聞きします。制限の内容をお書きください。

（ 例）1シーズンに4回以上の参加が必要 ）

質問1-6. 1試合当りのボランティア参加者は平均何人でしたか。また、アルバイトスタッフは平均何人でしたか。

1. ボランティア参加者 平均（ ）人
2. アルバイトスタッフ 平均（ ）人

5. その他 ()

5. その他 ()

13. その他 ()

13. その他 ()

$$\left[\begin{array}{c} \\ \\ \end{array} \right]$$

6. 関係者の知人への依頼

7. その他（ ）

質問2-2. ボランティア参加者の説明会（オリエンテーション）は実施していますか。その開催頻度と対象者についてお書きください。

（例）1シーズンごとに参加者全員を対象に開催

質問2-3. 今シーズンのボランティア参加者の説明会（オリエンテーション）の日程が決まっていたらご記入ください。

（ ）月 （ ）日

質問2-4. ボランティア参加者の待遇についてお聞きします。当てはまるもの全てに○をしてください。

1. 交通費（実費負担分） 2. 交通費（参加者全員一律の金額）
3. 交通費（実費負担分）+ α （ $\alpha =$ _____ 円）
4. 食事（現物支給） 5. 食事代（ _____ 円）
6. ユニフォーム貸与 7. ユニフォーム贈与 8. 試合のチケット
9. その他（ ）

質問2-5. ボランティア参加者に対してどのような施策を実施していますか。当てはまるもの全てに○をしてください。

1. 活動時のチーム代表挨拶 2. ボランティアリーダーの育成 3. 感謝状
4. 表彰制度 5. 食事会（懇親会） 6. 選手との交流会 7. 慰安旅行
8. 名札・名刺・登録証の発行 9. ユニフォームの製作 10. マスコミへの露出
11. 物品の支給⇒（支給内容 _____）
12. その他（ ）

ボランティア参加者の活動継続についてお聞きします。

質問3-1. チーム運営にとってボランティア参加者の活動の継続性はどの程度重要な問題ですか。当てはまる程度に○をつけてください。

1. まったく重要でない 2. あまり重要でない 3. どちらともいえない 4. やや重要である 5. 大変重要である

質問3-2. 質問3-1でそのように思われる理由をお書きください。

質問３－３．チームがボランティア参加者の活動の継続のために行っている施策や対応、その効果について具体的にお書きください。

例) 月に１度の懇親会を開催し、ボランティア参加者とのコミュニケーションを取っている

質問３－４．継続して活動に参加するボランティア参加者と、短期で活動をやめるボランティア参加者（長続きしないボランティア参加者）にはどのような差異があると思いますか。お書きください

質問３－５．ボランティア参加者の活動継続にはどのような要因が影響していると思いますか。お書きください。

質問項目は以上です。お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

「bjリーグにおけるボランティアに関する調査」ご協力をお願い

本調査はbjリーグの各チームにおいて、ボランティアとしてチームの活動にご協力頂いている皆様の現状を把握することを目的とした調査です。調査結果はリーグ及びチーム間で共有し、今後の活動の参考にさせていただきます。

ご記入頂きました回答に関しましては、全て統計的に処理されますので、ご迷惑をおかけするようなことは決まてございません。個人の情報がチーム担当者や他者に伝わることも一切ございませんので、率直にご回答いただきますようご協力をお願い致します。

また、大変お手数ですがアンケートはご帰宅後にご記入頂き、アンケート用紙の入っていた封筒(宛先印字済み)にて、配布された日から5日以内にポストにご投函下さい。なお、同封のボールペンはご協力のお礼でございますので、返送なさらずにお受け取りください。

本調査に関しまして、ご不明な点がございましたら下記までご連絡ください。
何卒ご理解・ご協力をお願い申し上げます。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 磯谷美穂
指導教員 早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 木村和彦
TEL:
E-MAIL:

bjリーグにおけるボランティアに関する調査

【協力】株式会社日本プロバスケットボールリーグ

本調査はbjリーグの各チームにおいて、ボランティアとしてチームの活動にご協力頂いている皆様の現状を把握することを目的とした調査です。調査結果はリーグ及びチーム間で共有し、今後の活動の参考にさせていただきます。

ご記入頂きました回答に関しましては、全て統計的に処理されますので、ご迷惑をおかけするようなことは決してございません。個人の情報がチーム担当者や他者に伝わることも一切ございませんので、率直にお答えいただきますようご協力をお願い致します。

なお、お手数ですがご記入いただけましたら、**配布された日から5日以内**にポストにご投函下さい。なお、ご不明な点がございましたら下記までご連絡ください。何卒宜しくお願いいたします。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 磯谷美穂
指導教員 早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 木村和彦
TEL:
E-MAIL:

アンケートの記入日をご記入下さい。 月 日 曜日

質問 1.ご自身についてお聞きします。以下の項目について、それぞれあてはまるもの1つに○をつけて下さい。

問 1	性別	1.男 2.女
問 2	年齢	1.10 歳代 2.20 歳代 3.30 歳代 4.40 歳代 5.50 歳代 6.60 歳代 7.70 歳代以上
問 3	職業	1.会社員 2.団体職員 3.公務員 4.自営業 5.主婦 6.パート・アルバイト 7.学生 8.退職者(定年退職者)・無職 9.その他()
問 4	最終学歴	1.中学校 2.高校 3.専門学校 4.短大・高専 5.大学 6.大学院 7. その他()

質問 2.ボランティア活動についてお聞きします。

問 1.どのチームで活動をされていますか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.仙台89ERS 2.新潟アルビレックスBB 3.富山グラウジーズ 4.埼玉ブロンコス 5.東京アパッチ
6.浜松・東三河フェニックス 7.滋賀レイクスターズ 8.大阪エヴェッサ 9.高松ファイブアローズ 10.ライジング福岡
11.大分ヒートデビルズ 12.琉球ゴールデンキングス

問 2.このチームのボランティア活動は何で知りましたか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.チームのホームページ 2.新聞や雑誌での告知 3.参加者からの紹介・クチコミ 4.学校での情報
5.学校の授業やプログラム 6.所属団体(ボランティア団体など)での情報 7.関係者からの依頼 8.その他()

問 3.いつからこのチームの活動に参加されましたか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.2005-2006 シーズン 2.2006-2007 シーズン 3.2007-2008 シーズン 4.2008-2009 シーズン

問 4.これまでに何回このチームの活動に参加されましたか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.前회가初めて 2.2~5回 3.6~10回 4.11~15回 5.16~20回 6.20~25回 7.25~30回 8.31回以上

問 5.このアンケートを配布された活動日はいつですか。日付をご記入下さい。

月	日	曜日
---	---	----

問 6.【問 5】の時には主にどの業務を担当されましたか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.会場設営 2.テーブルオフィシャル 3.チケットもぎり 4.半券集計 5.誘導案内 6.チラシ等の配布・準備
7.入場者カウント 8.ピン缶等持込禁止物対応 9.身体障害者の誘導案内 10.グッズ等販売 11.関係者・報道受付
12.チケット販売 13.総合案内 14.ブースタークラブ対応 15.イベント補助 16.ゴミ回収 17.会場清掃 18.会場撤収
19.その他()

問 7.このチームでのボランティア活動で、活動 1 日あたりの自己負担金額(交通費、食事代などの負担)はいくら程度ですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.自己負担なし 2.250 円程度 3.500 円程度 4.1,000 円程度 5.1,500 円程度
6.2,000 円程度 7.2,500 円程度 8.3000 円以上

質問 3.スポーツ・運動経験についてお聞きします。

問 1.これまでにバスケットボールをされたことがありますか。

1.はい 2.いいえ 3.どちらともいえない

問 2.【問 1】で「1.はい」と回答された方にお聞きします。現在ほどの程度バスケットボールをされていますか。その頻度としてあてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.週3回以上 2.週1回程度 3.1ヶ月に1回程度 4.半年に1回未満 5.全くしていない

問 3.これまでにバスケットボール以外のスポーツ・運動をされたことがありますか。

1.はい 2.いいえ 3.どちらともいえない

問 4.【問 3】で「1.はい」と回答された方にお聞きします。現在ほどの程度スポーツや運動をされていますか。その頻度としてあてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.週3回以上 2.週1回程度 3.1ヶ月に1回程度 4.半年に1回未満 5.全くしていない

問 5.身近ではどのような方がバスケットボールをされていますか。あてはまる対象1つに○をつけて下さい。

1.家族 2.親族 3.友人・知人 4.近隣の住民 5.よく見かける知らない人 6.たまに見かける知らない人 7.身近にいない

質問 4.このチームの活動に参加された動機についてお聞きします。下記のすべての項目について、それぞれあてはまる程度の数字に○をつけて下さい。

		非常にあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	他の人の役に立ちたいから	5	4	3	2	1
2	人から喜んでもらえたり、感謝されるような活動がしたいから	5	4	3	2	1
3	ボランティア活動に興味があるから	5	4	3	2	1
4	活動を通して地域社会の役に立ちたいから、	5	4	3	2	1
5	自分自身が成長したいから、	5	4	3	2	1
6	自分の存在感を得たいから	5	4	3	2	1
7	達成感や充実感を得たいから	5	4	3	2	1
8	社会的な視野を広げるために重要だから	5	4	3	2	1
9	新しい知識や経験を得たいから	5	4	3	2	1
10	自分の知識や経験を生かしたいから	5	4	3	2	1
11	いろいろな人と出会いたいから	5	4	3	2	1
12	友人をつくりたいから	5	4	3	2	1
13	異なる年齢の人たちと一緒に何かする機会になるから	5	4	3	2	1
14	気分転換やリラックスする機会が得られるから	5	4	3	2	1
15	日常に無いおもしろい機会を与えてくれるから	5	4	3	2	1
16	余暇時間を有効に過ごしたいから	5	4	3	2	1
17	社会の一員として当然と思ったから	5	4	3	2	1
18	地域の活性化に興味があるから	5	4	3	2	1
19	会社や学校、地域団体で参加することになったから	5	4	3	2	1
20	知人や通人が参加するから	5	4	3	2	1
21	知人や友人に誘われたから	5	4	3	2	1
22	他の人から認められたいから	5	4	3	2	1
23	何らかの報酬や物品を得たいから	5	4	3	2	1
24	スポーツが好きだから	5	4	3	2	1
25	プロスポーツに関わりたいから	5	4	3	2	1
26	試合を観戦したいから	5	4	3	2	1
27	選手と交流することができるから	5	4	3	2	1
28	選手との気持ちを共感したいから	5	4	3	2	1
29	選手の活動を支援したいから	5	4	3	2	1
30	選手に関心があるから	5	4	3	2	1

31	バスケットボールやスポーツの普及に貢献したいから	5	4	3	2	1
32	チームの運営に役立ちたいから	5	4	3	2	1
33	チームの活動を盛り上げたいから	5	4	3	2	1
34	何らかの形でチームにかかわりたいから	5	4	3	2	1
35	チームの勝利に貢献したいから	5	4	3	2	1
36	チームのスタッフと交流することができるから	5	4	3	2	1
37	チームの理念に共感したから	5	4	3	2	1
38	その他()	5	4	3	2	1

質問 5.このチームでの活動についての満足度についてお聞きします。下記のすべての項目の満足度について、それぞれあてはまる程度の数字に○をつけて下さい。

		大変満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	非常に 不満	知らない 経験がない わからない
1	ボランティア参加者からの個人的な気遣い	5	4	3	2	1	0
2	チームのスタッフとのコミュニケーション	5	4	3	2	1	0
3	チームのスタッフからの個人的な気遣い	5	4	3	2	1	0
4	自分の役割がはっきりしていること	5	4	3	2	1	0
5	業務のやり方や内容が効果的・効率的であること	5	4	3	2	1	0
6	ボランティア同士の人間関係	5	4	3	2	1	0
7	チームやボランティアの一体感	5	4	3	2	1	0
8	地域社会の役に立っているという実感	5	4	3	2	1	0
9	チームの役に立っているという実感	5	4	3	2	1	0
10	選手との交流の機会	5	4	3	2	1	0
11	説明会や講習会	5	4	3	2	1	0
12	チーム代表の挨拶	5	4	3	2	1	0
13	ボランティアリーダーの育成	5	4	3	2	1	0
14	感謝状	5	4	3	2	1	0
15	表彰制度	5	4	3	2	1	0
16	食事会(懇親会)	5	4	3	2	1	0
17	選手との交流会	5	4	3	2	1	0
18	名札・名刺・登録証	5	4	3	2	1	0
19	ボランティアのユニフォーム	5	4	3	2	1	0
20	テレビや雑誌などメディアへの露出	5	4	3	2	1	0
21	チーム発行誌	5	4	3	2	1	0
22	試合のチケットの贈与	5	4	3	2	1	0
23	その他()	5	4	3	2	1	0

質問 6.このチームでのボランティア活動に対する考えやお気持ちについてお聞きします。下記のすべての項目について、それぞれあてはまる程度の数字に○をつけてください。

		非常にあて はまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	全くあては まらない
1	活動がうまくいくように周囲の期待以上の努力をしている	5	4	3	2	1
2	友人にこのチームの素晴らしさについて興味をもつように話す	5	4	3	2	1
3	このチームへの愛着心はほとんどない	5	4	3	2	1
4	チームの活動を継続するためにどんな役割でも引き受ける	5	4	3	2	1
5	自分とこのチームとの価値観がとてもよく似ていると思う	5	4	3	2	1

6	このチームのメンバーであることを他の人に話すことが誇りに感じる	5	4	3	2	1
7	このチームより他のボランティア組織の方が活躍できる	5	4	3	2	1
8	このチームはボランティアとしての能力を十分に引き出してくれる	5	4	3	2	1
9	このチームから脱退しようと考えている	5	4	3	2	1
10	このチームのメンバーになろうと決めたことをとてもうれしく思う	5	4	3	2	1
11	漠然とこのチームに尽くしていても得られることがあまりない	5	4	3	2	1
12	このチームの活動方針にしばしば同意できないことがある	5	4	3	2	1
13	このチームの将来が本当に気になる	5	4	3	2	1
14	このチームはボランティアとして活動するための最適な団体だ	5	4	3	2	1
15	このチームでボランティアを始めたことは明らかに私の誤りだ	5	4	3	2	1

質問 7.今後のこのチームでの活動の意志についてお聞きます。下記のそれぞれの質問について、あてはまる程度の数字に○をつけて下さい。

		非常にあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1	今後もボランティアとしてこの活動に続けて参加していきたい	5	4	3	2	1
2	どの業務の担当になってもこの活動を続けたい	5	4	3	2	1
3	チームの成績が低迷してもこの活動を続けたい	5	4	3	2	1

質問 8.今後このチームでの活動において、1 日につきいくらまでの自己負担額(交通費や食事代などの負担)であれば参加し続けますか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1.自己負担が必要ならば参加しない 2.250 円程度 3.500 円程度 4.1,000 円程度 5.1,500 円程度
6.2,000 円程度 7.2,500 円程度 8.3,000 円以上でも参加する

質問 9.チームやbjリーグに対してご意見やご要望をご自由にお書き下さい。

質問 10.【任意】効率的に分析を行うため、差し支えなければお名前をご記入下さい。

※お名前は、調査結果を整理する目的以外には使用致しません。

氏名

質問項目は以上です。お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

謝辞

修士論文の作成にあたっては、たくさんの方からお力添えを頂きました。

まず他学部から来た私を温かく受け入れて下さり、不勉強な私をいつも励まし、熱心に指導して下さいました木村先生に心からお礼申し上げます。昨日の夜に言っていた「よくできてたよ、勉強したね」という言葉は一生忘れられません。

副査を引き受けて下さった、原田先生、間野先生にも心よりお礼申し上げます。

そして、いつも率直で的確なアドバイスをくれる宮宗くん、何事にも熱くて、真っ直ぐな誉さん、いつも笑顔で気遣ってくれる白さんとは、先生も交えていろいろな話ができて、本当に楽しくて有意義な時間を過ごすことができました。TAの石井さんにも、いつも気にかけていただいて、不勉強な私にも優しく丁寧にご指導くださり、本当に感謝しています。

原田研究室・間野研究室的皆さんにも、大事な時にいつも助けられました。また、いつも賑やかで明るい木村ゼミの皆さんにも、たくさんの元気をもらいました。本当に感謝いたします。

また、今回の調査に際して、快くご協力頂いたb jリーグの日下部さんや、私の論文の進捗状況をいつも心配していろいろと助けていただいた工藤さんには、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

そして最後に、いつも私の背中を押し、受け入れてくれた両親には、感謝してもしきれません。そのおかげで、素晴らしい学生生活を送ることができ、かけがえのない仲間ができました。今後もこの経験を糧として、前に進んでいきたいと思います。

2009年1月15日

磯谷 美穂